京都剣鉾のまつり調査報告書

1 論説編



京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編

京都 剣鉾のまつり

調査報告書 1 論説編

裏表紙 『下御霊神社誌』

はじめに

その実態は明らかではなかった。する、もうひとつの鉾の祭りがある。その鉾は、総称して剣鉾と呼ばれているが、「祇園祭の山鉾巡行は、京都の夏に欠かせない風物である。その鉾と起源を同じく

ことは明らかである。

ことは明らかである。

さもそも、剣鉾という語が京都においても、一般的ではなく、昭和六十年頃の京をは明らかである。

とは明らかである。

といった意匠を冠して呼ばれるものであった。

しかし、稀ではあるが鉾都市の調査の過程で総称として定着していったものである。

地域での呼称は、あくる。

とは明らかである。

であるが、本書の活用にあたって、まずその要点について、示しておきたい。討を試みた。その具体的な成果については、本書において明らかにしているところら調査し、その源流を探り、歴史的展開を明らかにし、剣鉾の定義についても再検剣鉾を伴う祭礼行事の調査を、民俗学、民具学、文献史学その他の多角的な視点か十二年度から二十四年度にかけておこなった調査では、剣鉾そのものだけでなく、十二年度から二十四年度にかけておこなった調査では、剣鉾そのものだけでなく、非二年度がら二十四年度にかけておこなった調査では、剣鉾そのものだけでなく、

呪具としての要素として付与されたものである。浄める役割がある。合わせて、リズミカルな音を響かす鈴や、たなびく吹散なども、く掲げられた鉾先の剣が前後にしなることにより、輝くことで、周囲の悪霊を集めである。剣鉾の本来の目的は、祇園祭と同じく、御霊信仰における呪具であり、高剣鉾とは、単にその造形によるものではなく、祭礼行事と一体で理解すべきもの

よって護持され、神輿の巡幸の先導を務めるということである。はなく、鉾仲間もしくは鉾町といった、氏子地域のなかの有志の集団や地縁組織にもう一つ重要なことは、これも祗園祭と共通するところであるが、神社の祭具で

徴のみが伝承されているものがほとんどである。 世のような典型的な「剣鉾のまつり」は、上御霊神社、下御霊神社、岡崎神社、 このような典型的な「剣鉾のまつり」は、上御霊神社、下御霊神社、岡崎神社、

本書では、剣鉾および剣鉾の伴う祭りの全貌を明らかにするため、京都市内につ本書では、剣鉾および剣鉾の伴う祭りの全貌を明らかにすることができた。これらは、来歴や伝承母体の性に重構造であることを明らかにすることができた。これらは、来歴や伝承母体の性に重構造であることを明らかにすることができた。これらは、来歴や伝承母体の性にが異なるものの、いずれにしても、京都において重要な祭礼文化、地域文化である。

化が進むことを願っている。本調査の成果が、京都市民の誇りとして、これらを活かした地域振興、地域活性

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会

委員長 植木 行宣

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編

調査報告書 1 論説編 京都 剣鉾のまつり

目 次

はじめに

植木 行宣

目次

京都 剣鉾のまつり分布図

総説

剣鉾のまつりの歴史

剣鉾のまつりの行事

長谷川 嘉和

二九

山路 興造

小嵜 善通

[コラム] 昭和の京都市内剣鉾調査

第二章 モノとしての剣鉾

剣鉾の構成と動態 ―地域性と時代性に着目して 計測調査が拓く祭礼民具研究の可能性 伊達

溝邊 悠介

仁美

溝邊 悠介

七四 五七

紀年銘が刻まれた剣鉾の剣一覧

[コラム] 犬鷹鉾の調査 ―主に竿頭額について 久保 智康

第三章 剣鉾のまつりの背景

剣鉾と町共同体

貴所からの祭具拝領

[コラム] 下御霊神社剣鉾一枚摺「神幸図! 福原

※ 敏男

村山 五島

1 弘太郎 $\overline{\bigcirc}$

[調査報告書 2 民俗調査編 目次]

はじめに

植木 行宣

京都 剣鉾のまつり分布図

第六章 民俗調査報告

紫野今宮神社 今日祭/八大神社 上一乗寺氏子祭/鷺森神社 神幸祭/崇道神社 大祭/ 熊野神社 神幸祭/神泉苑 神泉苑祭/清和天皇社春季例祭/大豊神社氏神祭/ 《春の剣鉾のまつり》

金礼宮春季例大祭/吉田神社氏子講社大祭/元祇園椰神社神幸祭/ 新日吉神宮小五月会ノ山王神社大祭ノ菅大臣神社例祭ノ市比賣神社いちひめまつりノ 八瀬天満宮社 例祭/地主神社神辛祭/藤森神社藤森祭/須賀神社 例祭/

京都系びす神社例大祭・神幸祭/御霊神社(上御霊神社)御霊祭/

下御霊神社 下御霊祭還幸祭/愛宕神社・野宮神社 嵯峨祭

《秋の剣鉾のまつり》

三嶋神社 神幸祭/晴明神社 晴明祭/住吉神社 住吉祭/瀧尾神社 神幸祭/

北野天満宮瑞饋祭/御香宮神社御香宮祭礼/平岡八幡宮秋季例祭/粟田神社栗田祭 春日神社春日祭/長谷八幡宮秋季大祭/木嶋座天照御魂神社(蚕ノ社)神幸祭。 五条天神社 氏子祭/山國神社 山国祭/北白川天神宮 秋季大祭/吉田神社末社今宮社 神幸祭/

石座神社 例大祭(岩倉火祭)/幡枝八幡宮社 秋季大祭/八神社 秋季大祭/ 福王子神社 秋季大祭/花園今宮神社 神幸祭/城南宮 城南祭/由岐神社 例祭(鞍馬火祭) 八幡宮社 秋の大祭/岡崎神社 氏子大祭/山ノ内山王神社 山王祭/住吉大伴神社 秋祭り/ 大森賀茂神社 秋季大祭/三栖神社 三栖祭(神幸祭・還幸祭)/熊野神社 秋季例大祭/

新宮神社 例大祭/天道神社 例大祭

《参考・周辺の剣鉾のまつり》

鳅山神社 (亀岡市) 秋季大祭 (亀岡祭) 若松神社(大津市)春季大祭/猿田彦神社(草津市)春祭/生和神社(野洲市)春祭り/ /請田神社(亀岡市) 例祭(保津の火祭り)

巻末資料

用語解説

執筆者一覧

第四章 剣鉾のまつりの現在

鉾差しの芸態

剣鉾の「復興」と鉾差しの諸集団

[コラム] 九州最南端に伝わる剣鉾状祭具 御崎祭りの鉾を手がかりに

第五章 絵画資料

剣鉾を描く絵画

絵画資料一覧

昌之

二八

今中 崇文 一 五

今中 崇文

濱住 真有 真有

一八八八

福持 昌之 九四 巻末資料

用語解説

参考文献等一覧

調査体制

執筆者一覧

一九七

 $\frac{1}{0}$

[調査報告書 3 資料編 目次

はじめに

植木 行宣

例言

第七章 歴史資料

村山 弘太郎

紫野今宮神社/京都ゑびす神社/御霊神社(上御霊神社)/

愛宕神社・野宮神社(嵯峨祭)/三嶋神社/瀧尾神社/平岡八幡宮/粟田神社/ 木嶋座天照御魂神社/岡崎神社/花園今宮神社/由岐神社(鞍馬火祭)/

天道神社

第八章 銘文・箱書

溝邊 悠介

崇道神社/八瀬天満宮社/地主神社/須賀神社/新日吉神宮/菅大臣神社/ 市比賣神社/金札宮/元祇園梛神社/京都ゑびす神社/御霊神社(上御霊神社) 熊野神社/神泉苑/清和天皇社/大豊神社/紫野今宮神社/八大神社/鷺森神社/

住吉大伴神社/福王子神社/花園今宮神社/城南宮/由岐神社(鞍馬火祭)/ 北白川天神宮/吉田神社末社今宮社/春日神社/長谷八幡宮/木嶋座天照御魂神社/ 北野天満宮/御香宮神社/平岡八幡宮/粟田神社/五条天神社/山國神社/ 下御霊神社/愛宕神社・野宮神社(嵯峨祭)/三嶋神社/晴明神社/住吉神社/ 大森賀茂神社/三栖神社/熊野神社/八幡宮社/岡崎神社/山ノ内山王神社/

第九章 計測数値

石座神社(岩倉火祭)/幡枝八幡宮/八神社/天道神社/中森家

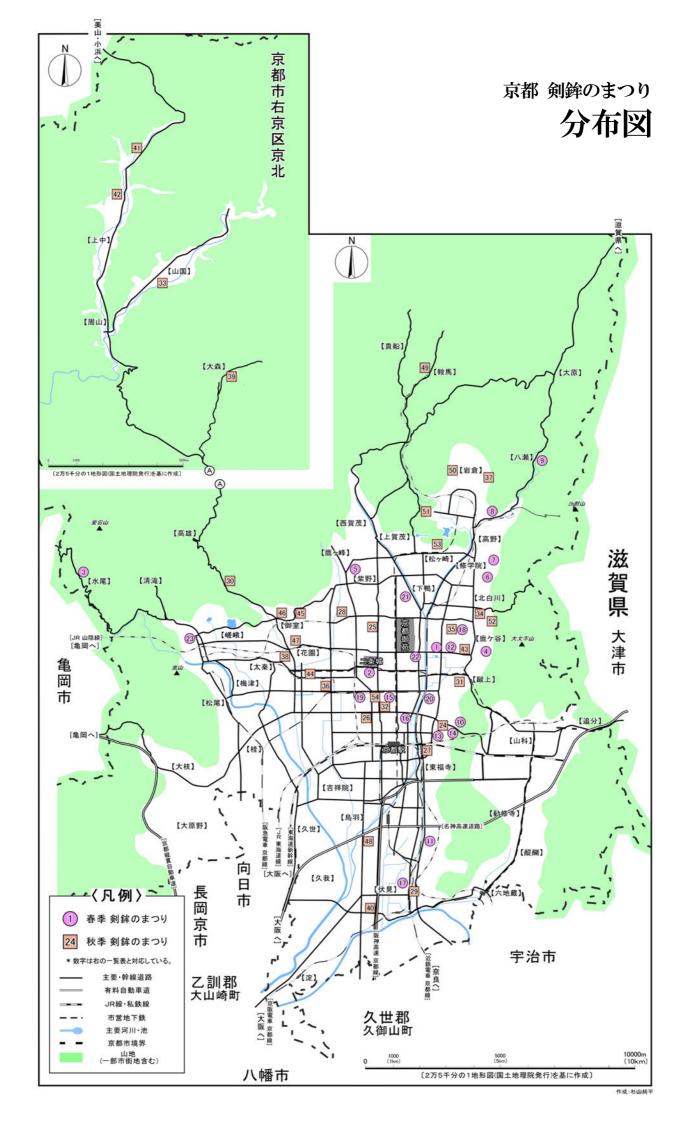
凡例

溝邊 悠介

計測数値一覧(剣・錺・錺受)【A表】

計測数値一覧(受金・鈴・棹・吹散・銘文情報)【B表】

執筆者一覧



No.		開催日程	祭礼の名称	祭りに出る 剣鉾の数	神社等の所在地
	1	毎年4月29日	熊野神社の神幸祭	1	左京区聖護院山王町
	2	F # F F F F F	神泉苑の神泉苑祭	3	中京区門前町
	3	毎年5月3日	清和天皇社の春季例祭	3	右京区嵯峨水尾宮ノ脇町
	4	毎年5月4日	大豊神社の氏神祭	7	左京区鹿ケ谷宮ノ前町
	5	毎年5月5日に神幸祭, 5月15日に近い日曜日に還幸祭	紫野今宮神社の今宮祭	9	北区紫野今宮町
	6		八大神社の上一乗寺氏子祭 市登民「一乗寺八大神社の 剣鉾差し」	3	左京区一乗寺松原町
	7		鷺森神社の神幸祭	3	左京区修学院宮ノ脇町
	8	<i>57.</i> 5050	崇道神社の大祭	2	左京区上高野西明寺山
春	9	毎年5月5日	八瀬天満宮社の例祭	3	左京区八瀬秋元町
の 剣	10		地主神社の神幸祭	2	東山区清水一丁目
剣鉾のまつり	11		藤森神社の藤森祭	1	伏見区深草鳥居崎町
	12		須賀神社の例祭	3	左京区聖護院円頓美町
	13	<i></i>	新日吉神宮の小五月会	5	東山区妙法院前側町
	14	毎年5月第2日曜日	山王神社の大祭	1	東山区清閑寺池田町
	15		菅大臣神社の例祭	2	下京区菅大臣町
	16	毎年5月13日	市比賣神社のいちひめまつり	1	下京区本塩竃町
	17	毎年5月15日	金札宮の春季例大祭	1	伏見区鷹匠町
	18		吉田神社の氏子講社大祭	2	左京区吉田神楽岡町
	19	毎年5月第3日曜日	元祗園梛神社の神幸祭	7	中京区壬生梛ノ宮町
	20		京都ゑびす神社の例大祭・神幸祭	6	東山区小松町
	21	毎年5月18日	御霊神社(上御霊神社)の御霊祭	6	上京区上御霊前町
	22	毎年5月第3もしくは第4日曜日	下御霊神社の下御霊祭還幸祭	4	中京区下御霊前町
	23	毎年5月第4日曜日	愛宕・野宮神社の嵯峨祭 市登民「嵯峨祭の剣鉾差し」	5	右京区嵯峨野地域
N		開催日程	祭礼の名称	祭りに出る	神社等の所在地

No.		開催日程	祭礼の名称	祭りに出る 剣鉾の数	神社等の所在地
	24	毎年9月第3日曜日	三嶋神社の神幸祭	2	東山区上馬町
	25	毎年9月秋分の日	晴明神社の晴明祭	2	上京区晴明町
	26	毎年9月第4日曜日	住吉神社の住吉祭	3	下京区藪之内町
	27	毎年9月最終日曜日	瀧尾神社の神幸祭	1	東山区本町11丁目
	28	毎年10月1日に神幸祭, 10月4日に還幸祭	北野天満宮の瑞饋祭	2	上京区馬喰町
	29	毎年10月9日前後の日曜日	御香宮神社の御香宮祭礼	0	伏見区御香宮門前町
	30	毎年10月体育の日の前日	平岡八幡宮の秋季例祭 市登民「平岡八幡宮の剣鉾差し」	4	右京区梅ケ畑宮ノ口町
	31		粟田神社の粟田祭	18	東山区粟田口鍛冶町
	32	毎年10月体育の日	五条天神社の氏子祭	2	下京区天神前町
	33	毎年10月第2土曜日に神幸祭, 10月第2日曜日に還幸祭	山國神社の山国祭	3	右京区京北鳥居町宮ノ元
	34		北白川天神宮の秋季大祭	3	左京区北白川仕伏町
	35	毎年10月第2日曜日	吉田神社末社今宮社の神幸祭	5	左京区吉田神楽岡町
秋	36		春日神社の春日祭 市登民「西院春日神社の剣鉾差し」	5	右京区西院春日町
剣	37	毎年10月10日前後の日曜日	長谷八幡宮の秋季大祭	3	左京区岩倉長谷町
鉾	38	毎年10月12日前後の日曜日	木嶋座天照御魂神社 (蚕ノ社) の神幸祭	4	右京区太秦森ケ東町
ま	39	毎年10月15日前後の日曜日	大森賀茂神社の秋季大祭	1	北区大森東町
つ り	40	毎年10月16日前後の日曜日	三栖神社の三栖祭 市登民「三栖の炬火祭」	5	伏見区横大路下三栖城ノ前町
	41	毎年10月第3土曜日に神幸祭, 10月第3日曜日に還幸祭	熊野神社の秋季例大祭	1	右京区京北上弓削町宮ノ本
	42		八幡宮社の秋の大祭	1	右京区京北上中町宮ノ谷
	43		岡崎神社の氏子大祭	5	左京区岡崎東天王町
	44		山ノ内山王神社の山王祭	2	右京区山ノ内宮脇町
	45		住吉大伴神社の秋祭り	1	右京区龍安寺住吉町
	46	毎年10月第3日曜日	福王子神社の秋季大祭	6	右京区宇多野福王子町
	47		花園今宮神社の神幸祭	3	右京区花園伊町
	48		城南宮の城南祭	3	伏見区中島鳥羽離宮町
	49	毎年10月22日	由岐神社の例祭 市登民「鞍馬火祭」	8	左京区鞍馬本町
	50	毎年10月23日前後の土曜日	石座神社の例大祭 市登民「岩倉火祭」	10	左京区岩倉上蔵町
	51	毎年10月23日前後の日曜日	幡枝八幡宮社の秋季大祭	2	左京区岩倉幡枝町
	52	毎年10月24日直前の日曜日	八神社の秋季大祭	3	左京区銀閣寺町
	53	毎年10月第4日曜日	新宮神社の例大祭	2	左京区松ケ崎林山
	54	毎年11月3日	天道神社の例大祭	5	下京区西田町

例 言

調査事業と報告書

、本報告書は、京都市が設置した京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委 員会による剣鉾調査の成果をまとめたものである。本事業の推進は、文化庁の補

助事業として実施した。

平成二十二年度 地域伝統文化総合活性化事業 (委託事業)

平成二十三年度 地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業

平成二十四年度 地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業

平成二十五年度 文化遺産を活かした地域活性化事業

報告書の構成・体裁

二、本報告書の構成は次の通り。

①論説編

②民俗調査編

A4判・モノクロ

A4判・カラー

③資料編(歴史資料、銘文・箱書、計測数値)

A4判・モノクロ

④資料編(剣鉾計測カード) PDF・データディスク

なお、

①<

④のPDFについては、カラーで

④のデータディスクに収めている。

三、京都市内については、造形上、剣鉾の特徴をもつもの、これまで剣鉾と考えら れてきたものについて、すべてを調査対象とした。

稿いただいた報告も、 市外の事例についても比較対照するための参考として、委員および調査員に寄 本調査報告書に掲載した。

映像記録

本報告書と同時に、映像記録(映像編)も作成した。

⑤民俗誌映像「祭りに生きる 京都の鉾差し」 BDビデオ 七六分

⑥技術比較映像「剣鉾の組み方と差し方」 BDビデオ 一四六分

①マップ映像「京都の剣鉾差し」

DVDビデオ 八八分

⑧映像解説書

DVDジャケット判・モノクロ

過年度の成果物

六、本事業に関わって、本報告書の発行以前にまとめた成果物は次の通り。

平成二十二年度

『京都の剣鉾まつり』(A5判・モノクロ 一五七頁)

平成二十三年度

『京都の剣鉾まつり 2 「差革」編』(A5判・モノクロ 三九頁)

『差革の作り方 ―差革製作講習会の記録』(DVDビデオ 三四分)

本報告書に掲載されていない情報もあるため、適宜参照していただきたい。

その他

七、参考文献等一覧および調査体制は①論説編の巻末にのみ掲載し、用語解説は① ぞれの巻末に掲載した。 論説編および②民俗調査編の巻末に掲載した。なお、各巻の執筆者一覧は、それ

第一章 総説

剣鉾のまつりの歴史

山路 興造

はじめに

象深く覚えている。

・出が初めて京都の祇園祭、それも山鉾の巡行を観たのは昭和三十一年(一条深く覚えている。
・当時東京の高校生であった私は、それまでは四条九五六)のことであった。
当時東京の高校生であった私は、それまでは四条元五六)のことであった。
当時東京の高校生であった私は、それまでは四条条深く覚えている。

不下になっていった。

「おとで知ったのだが、この年の巡行は祇園祭の山鉾巡行にとって、画期的あとで知ったのだが、この年の巡行は祇園祭の山鉾巡行にとって、画期的あとで知ったのだが、この年の巡行は祇園祭の山鉾巡行にとって、画期的あとで知ったのだが、この年の巡行は祇園祭の山鉾巡行にとって、画期的

めて観た時、幾つかの素朴な疑問を持ち、やがてその疑問が、私が「祭礼」と後祭(七月二十四日)が一本化されて現在に至っている(1)。私はこの祭りを初その後も山鉾巡行のコースは適宜変更され、祭りの期間も前祭(七月十七日)

ぜか。そんな素朴な若い頃の疑問が、私を研究へと駆り立てていったのであけ、祭礼における神輿の巡行や、それに付いて曳き出される飾り屋台の巡行を、なぜ「山」「鉾」と呼ぶのかという疑問である。東京に生まれ育った私関係なく執行されるのかということである。第二は、この華麗なる屋台の巡関係なく執行されるのかということである。第二は、この華麗なる屋台の巡関の第一は、八坂神社の祭礼といいながら、なぜ山鉾巡行は八坂神社とや「民俗芸能」に学問的興味を抱くきっかけになったように思われる。

祭儀における鉾の形状と歴史

を持つ特殊な形態であったが、わが国では広がらなかったという。とうで、「矛」は先端が細長い両刃、もしくは三叉刃、「戈」は「字形の穂先くにこの武具が発達したのは大陸においてであろう。木製や金属製の長い柄の先に付ける鋭利な金属の形状によって「矛・戈・鉾」などの区別があったい。がでてくる。弥生時代には銅製・鉄製の矛が存在しているが、やはり早に、ゴースの、は本来武具である。わが国の国生み神話には「天の瓊矛」(『日本書を持つ特殊な形態であったが、わが国の国生み神話には「天の瓊矛」(『日本書

っていったようである。
のていったようである。
は儀仗用、もしくは祭祀用の祭具として扱われるようにな譜が近い。しかしいずれにしても武器としての鉾や矛の系譜は、早くに槍に広くない。現在われわれが「剣鉾」とする形状は、むしろ「銅剣」にその系広くない。現在われわれが「剣鉾」とする形状は、むしろ「銅剣」にその系のではあるが先き細の尖ったものが多く、鉾先が幅広のものでも幅はさしての質問題となるのは「鉾」である。しかし、武器としての鉾の形状は、両

[図1] 唐草銀象嵌鉄鉾(平安時代、国宝、春日大社本宮御料古神宝類)(奈良春日大社蔵)



[図2] 『駒競行幸絵巻』(部分,重文、鎌倉時代)(和泉市久保惣記念美術館蔵)



[図3]『年中行事絵巻』巻九 祇園御霊会の神輿渡御行列(平安時代。江戸前期模写)(京都市立芸術大学芸術資料館蔵)

国生み神話の「天の瓊矛」からして、祭具としてのホコともいえるが、天国生み神話の「天の瓊矛」からして、祭具としてのホコともいえるが、 国生み神話の「天の瓊矛」からして、祭具としてのホコともいえるが、天

中行事絵巻』にみえるのが早く、その巻一 チメートル、鉾先は鋭角的に鋭く尖る。 鉾身中央に花唐草文様の銀象嵌がなさ かれている。 巻』(図2)や『一遍上人絵伝』の備後一宮吉備津神社の社頭舞楽などにも描 に用いる鉾と思われる。舞楽の舞台周囲に鉾を立て並べる例は、 上部が切られており鉾先の形状は不明)。 の行列の後尾に従った八人の楽人の手に、八尺ほどの鉾が握られている(絵の れている。絵画資料では平安時代最末期に、後白河法皇が描かせたという『年 は不明であるが、 などが、この時代の祭祀用 (儀仗用) 鉾の代表であろうか。 柄はないから全長 かが残り国宝に指定されている。その内の一本である 平安時代に制作とされたと思われる鉾は、 鉾身は四十八・八センチメートル程、 舞楽曲の 「振鉾」 「朝覲行幸」 奈良春日大社神宝のなかに何本 Þ 刃部の最大幅五・七セン 「太平楽」 「銀象嵌鉄鉾」 の図中、 「貴徳」 『駒競行幸絵 天皇の鳳輦 図1 など

わずかに広がり、 は十二尺程はある 持ちが描かれるが、 に王面を着けたこの舞人が手にしている鉾は、 『年中行事絵巻』巻九の (青龍・朱雀・白虎・玄武) なお、 同巻中には芸能者としての「王の舞」 三角形に閉じている。 図 3 。 その鉾は楽人が持つ鉾よりは柄が長く、 春日大社蔵の鉾とは鉾先が少し異なり、 が描かれるようになると、 「祇園御霊会」の行列では、 鉾先近くにヒレも付く。 八尺ほどである。これらの鉾 の姿も描かれるが、 いわゆる 神輿の前に四人の鉾 絵からの推測で 「四神鉾」と このヒレに 先端部で



版社発行)

の鉾をこの稿では仮に 同型である。この形状 与している「斎鉾」と 神宮が縁起物として授

「幸鉾」と呼んでおく。

大陸では、

唐代の敦

大陸伝来のものであろうが、 鉾が祭礼における神輿渡御の先駆けをな て僻邪を祓うという習

が描かれた壁画

(図 4)

が残るから、鉾によっ

馬姿の武人姿の者八名

鉾を手に捧げた騎

列に芸能者一行ととも

煌莫高屈に、貴人の行

俗は、

すという形態は、わが国における変容であろう。

を手にした者が描かれている。 描かれるのみである。賀茂祭の行列では 方式であったわけではなかろう。 霊会の場合のみで、 『年中行事絵巻』において、鉾が神輿渡御の先駆けをなす形態は、 奈良の春日社などにもあったらしく、必ずしも祇園御霊会だけの特別な 稲荷祭を描く巻十一では五基の神輿の前に「王の舞」が しかし、 神輿の前を鉾が行くという祭礼様式 「楉木」(柘榴の木で邪気を祓うとされる) 祇園御

御霊会という会式

付くなどの共通性があ

現在でいえば伊勢

は先が幅広で、

ヒレが

れた都市であるだけに、梅雨の時期に引き起こされる疫病の流行は、 洪水は家や田畑の水害のみならず、下水道の完備していない都市においては、 とされた「四神相応」の思想によく適合していた。近世には「山紫水明」と める為政者にとっては重大な問題であった。 疫病の蔓延を引き起こした。本来、平安京の多くの部分が、湿地帯に計画さ にこの山々に大量の雨が降ると、 都の場合、すぐ北方に連なる山々が盆地を流れる諸川の水源地であった。 った。水が清らかであるということは、水源地が近いということである。 もいわれるから、その環境はすこぶるよかったはずである。 盆地を流れる川は伏流水を含めて基本的に南流する。 平安京は三方を山に囲まれた盆地に立地する。北が高く南が低いために、 盆地内の川はたちどころに氾濫した。 中国で都城建設の適地 しかし難点もあ 故

ずはなく、正歴五年(九九四)の流行では五位以上の公家六十七人が死亡す げた者たちの祟りと考え、朝廷は貞観五年(八六三)六月に神泉苑で盛大な ただしその斎場が埋葬地の近くや水辺であったことは注目されてよい゜。 良親王・伊予親王・藤原夫人などの六柱であるが、 あちこちで御霊会が催行されているが、それで御霊が鎮まったとは思えない。 は難波の海に流したという(『扶桑略記』)。その後も花園・東寺・西寺・衣笠など るという惨状となり、紫野で御霊会を営み、御霊を幣束に付けて、 えて八柱を「御霊」として祀り慰撫したのである。しかしその後も治まるは 御霊会(『を催行した(『三代実録』)。祟りをなすと考えられた霊は崇道天皇 当時の為政者は、この疫病の流行を平安京遷都にかかわり、非業の死を遂 井上内親王など二柱を加 最終的に

御霊会が早く定例化したのは祇園御霊会であった。社伝では貞観十一年(八

社系の施設であった可能性が高い。

せた六十六本の鉾を立て、十四日に牛頭天王を奉じた神輿を神泉苑に送ったと、神社系の祭儀をその始まりとする。ただしこの社伝を記した『祇園社本と、神社系の祭儀をその始まりとする。ただしこの社伝を記した『祇園社本と、神社系の祭儀をその始まりとする。ただしこの社伝を記した『祇園社本の地にあったことが考えられる。この施設は幣東を奉納したとあるから、神団におったことが考えられる。この施設は幣東を奉納したとあるから、神田にという記録があり、咳病に効果があると信じられた宗教施設が、祇園社本と、神社系の禁を立て、十四日に牛頭天王を奉じた神輿を神泉苑に送ったけ系の施設であった可能性が高い。

一方、『日本紀略』延長四年(九二六)六月二十六日条には「供養祇園天神でる堂と考えられている(『一代要記』。

していったと思われる。 その後天禄元年(九七〇)には祇園御霊会が官祭となり(三十二社註式)、 その後天禄元年(九七五)には円融天皇の疱瘡平癒の報賽が行われる(『日本紀略』) 天延三年(九七五)には円融天皇の疱瘡平癒の報賽が行われる(『日本紀略』) その後天禄元年(九七〇)には祇園御霊会が官祭となり(三十二社註式)、

方四町於旅所之敷地、号大政所、」と御旅所設置の記事があり、神輿を大政所家条々記録』天延二年六月十四日条に「被始行御霊会、即被寄付高辻東洞院社伝の六十六本の鉾については確かめようがないが、神輿については『社

輩するように定まった。 されて、少将井の御旅所も成立 (「社家条々記録」)、婆利采女を奉じた神輿が駐神輿が加わり、保延二年 (一一三六) には冷泉東洞院の方四町の敷地が寄付旅所に舁き入れていたが、宗派が天台宗に転じたこともあって、八王子神の

祭礼における鉾とは何か

かで、その形態は基本的に「幸鉾」である。 平安時代末期の『年中行事絵巻』であるのだが、この絵巻では三基の神輿を 四本の鉾が先導する如き姿で描かれている。王の舞が持つ鉾も、神輿渡御の 四本の鉾が先導する如き姿で描かれている。王の舞が持つ鉾も、神輿渡御の であるのだが、この絵巻では三基の神輿を であるのだが、この絵巻では三基の神輿を

祇園社の「馬上鉾」

第」という文書があるが、そのなかに、録上』所収の「社家条々記録」(元亨三年) に、「祇園社草創以来代々、勅願次

上役為、則為断末代之牢籠、以御厩舎人六郎先生光吉勤仕、下社家、勅云、為儼明神之祭礼、宜被下鉾、早尋捜洛中富家、可差定馬保元二年,六月一日、為添御霊会祭礼、為増天神之威儀、副鎌鉾三張被

爱元亨三年馬上被停止了、自保元二年始差定、至丁元亨三年停止、年百六十七年也!

三一)に出された「寛喜新制」には「凡諸社之祭、以色々綾絹等数十疋、掛この鉾自体の形態がどのようであったかはわからないが、寛喜三年(一二

桙次第事」には、でとの掛け物は存続している。『祇園社記続録』所収の応永十六年の「馬上御はあまりの過差に朝廷より停止されているが、室町時代の祇園御霊会でも鉾は、綾絹などによる掛け物 (懸物) で飾られていたようである。この時に神宝・桙・標可停止過差」とあるように、鎌倉時代以降祭礼に出される神宝

一鉾 懸物十二 別当 神馬二疋

二鉾 懸物十一 社家 神馬一疋

三鉾 懸物九 一公文社家より

(中略)

十三鉾 懸物二 社家 但鉾ハ金仙造進之

足の取り分があったのである。と、それぞれの鉾の造進者と懸物数が記される。もちろんそれぞれに馬上料

馬上十二鉾と幸(犀)鉾

会に際し、犀鉾をかつぐを以てその公役としてをったのであろう」と述べて物の権利をともなって、室町時代に再登場する「馬上十二鉾」は、結局後白物の権利をともなって、室町時代に再登場する「馬上十二鉾」は、結局後白物の権利をともなって、室町時代に再登場する「馬上十二鉾」は、結局後白物の権利をともなって、室町時代に再登場する「馬上十二鉾」は、結局後白物の権利をとが存在し、彼らが「犀鉾神人」と呼ばれており、「恐らく祇園に「柑類の座」が存在し、彼らが「犀鉾神人」と呼ばれており、「恐らく祇園に「柑類の座」が存在し、彼らが「犀鉾神人」と呼ばれており、「恐らく祇園に「柑類の座」が存在し、彼らが「犀鉾神人」と呼ばれており、「恐らく祇園中の出先機関的性格を有していた祇園社には、鎌倉時代中期以降、多くの商は詳しいが、綿座・堀川材木座・織物業者の座・今宮魚商人の座などのなかに「柑類の座」が存在し、彼らが「犀鉾神人」と呼ばれており、「恐らく祇園をに関する祇園御霊会には、多くの鉾が登場するが、多額の馬上役銭と懸をに際し、屋鉾をかつぐを以てその公役としてをったのであろう」と述べて

図などには、それらしい姿はみあたらないようである。終えたという米沢市上杉博物館蔵の『洛中洛外図屏風』の祇園会神輿渡御の終えたという米沢市上杉博物館蔵の『洛中洛外図屏風(甲本)』や、永禄八年(一五六五)に狩野永徳が描きただし、たとえば一五二〇年代の京都を描くとされる国立歴史民俗博物館

中世前期京都の鉾の出る祭り

られていたからであろう。

がに後堀河天皇が祭の掛け物の過差を停止したのは、祇園御霊会に対してだかに後堀河天皇が祭の掛け物の過差を停止したのは、祇園御霊会に対してだのなかで中世の京都の祭礼は鉾の祭りだったのではないかと述べている。確間構造―御霊会・今宮祭・六斉念仏―』(『を出版した本多健一氏は、著書間構造―御霊会・今宮祭・六斉念仏―』)(『を出版した本多健一氏は、著書

いしこの過差の停止が出された鎌倉時代前期の、

京都の祭礼行列につい

「図5」 熊建系東玉神社古神宝類のうち 鉄鉾(鎌倉時代 14世紀、国宝)

における「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかった知・大平施曲、次流鏑馬上馬、」とある。ただし、この祭礼の神輿渡御行列、大神供、渡馬場参入社頭、次神輿出御、次道張舞、次師子舞、次田楽年における「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったにおける「御鉾」の順番は、必ずしも神輿を直接先導する位置ではなかったの様子が

代末期の制作とされる久保惣記念美術館蔵の『駒競行幸絵巻』の舞楽舞台に 作とされる象嵌鉾に近い。ただ鉾身(刀身)と柄をつなぐ柄元に、直径八・1 三・七センチメートル、刃の最大幅五・一センチメートル、 少ない現在、 センチメートルの金銅製の玉型の台座と、直径十二センチメートルの透かし彫りの 文様の象嵌が施されている。鉾先はやや丸く尖り、春日大社蔵の平安時代制 類のなかに、鎌倉時代の鉾として国宝に指定される象嵌の一対の鉄鉾がある を考える場合、大いに参考にはなる。 描かれる鉾(図2)の形態に似る。中世前期までに祭儀で使用された鉾資料の 金銅鍔がある。。刀身と柄の間に金属製の飾り台が入る形式の鉾は、 図5)。この鉾は木製の柄があり、全長二百六十センチメートル、鉾の刃部三十 鎌倉時代の鉾の形態はよくわからないのだが、 京都に現存する鉾ではないが、これらの鉾は鎌倉期の鉾の形態 和歌山県熊野速玉大社神宝 簡略ではあるが花唐草 鎌倉時

四 もう一つの鉾の機能

ている。 でいる。 前記本多氏はその状態を含めて中世期を「鉾の時代」と称しているの でいる。前記本多氏はその状態を含めて中世期を「鉾の時代」と称しているの する。前記本多氏はその状態を含めて中世期を「鉾の時代」と称しているの 南北朝の動乱が落ち着いて以降の京都の祭礼には、多くの鉾が文献に登場

を祓うという役目である。舞楽の最初に演じられる「振鉾」をはじめ、神輿渡御の先に行き、その行路気を斎場に入れないという機能を担っていた。私のいう「幸鉾」の系統で、日で用いられた。邪気や悪霊を追い払い、斎場(祭場)を清めるとともに、邪中世前期までの鉾は、兵具としての本来の機能を残し、祭具(儀仗用鉾)と

査の中心である「京都(剣鉾のまつり」に扱われた「剣鉾」なのである。せる「疫神」を集める依代として活用したのである。この鉾こそが今回の調この神の依代としての鉾の機能を、中世後期の都市住民は、疫病を蔓延さ

祇園祭の山鉾

平安京建都以来、疫病の流行を鎮めるのは、朝廷の任務であり責任であったが、どんなに盛大な御霊会を営んでも、それが治まったとは思われない。 たが、どんなに盛大な御霊会を営んでも、それが治まったとは思われない。 りの効果があったらしく、朝廷はもとより都市住民側にも受け入れられた形りの効果があったらしく、朝廷はもとより都市住民側にも受け入れられた形りの対果があったらしく、朝廷はもとより都市住民側にも受け入れられた形のたという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かにったという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かにったという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かにつたという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かにつたという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かにつたという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かにつたという「散楽空車」は、朝廷や神社側の趣向ではなく、経済的に豊かについる。

集めて追い出すという方法であった。それが疫神を生活圏から満遍なくかだした民俗を基盤とした方式であった。それが疫神を生活圏から満遍なくの祟りと考えるはずもなく、疫神の蔓延と考えて、民衆が生活の経験から生めだした民俗を基盤とした方式であった。それが疫神を生活圏から満遍なくかだした民俗を基盤とした方式であった。それが疫神を生活圏から満遍なくなる鎌倉時代後半を待たねばならないが、その場合、彼らはこの災害を御霊集めて追い出すという祭礼を集めて追い出すという祭礼を

条新町を中心とした町衆による山鉾の巡行が時間を少しずらせて進行する。駐輦し、一週間滞在して市中を廻り、還御する神社を中心とした祭りと、四現在の八坂神社の祭礼は、神社から舁き出された三基の神輿が、御旅所に

が、この祭を考えるのに便利である。
会」と呼ぶなら、都市住民主体の祭礼を「祇園祭」と呼んで分けて考えるの進行しているのである。平安時代以来の神社を中心とした祭礼を「祇園御霊同じ目的を持ちながらも、執行主体や形態を異にする二つの祇園祭が、同時

てる。山を作らない趣向人形のみの「屋台」も数基ある。た木(神木)の前に、趣向を凝らした物語の一場面などを人形によって飾り立は「作り山」と呼ばれる舁き山で、台上に作り物の山を設え、山の上に立て都市住民側の祇園祭の中心は、「鉾」と「山」の巡行である。「山」の多く

物を載せた形態で、「傘鉾」と呼ばれる (図7)。 に約五十尺の真木を建て、その頂に金属製の鉾頭を飾った「鉾」と称しながらも実際は鉾の形態ではなく、それぞれに趣向呼ばれる。「鉾頭」と称しながらも実際は鉾の形態ではなく、それぞれに趣向呼ばれる。「鉾頭」と称しながらも実際は鉾の形態ではなく、それぞれに趣向下態によって、長刀鉾・函谷鉾・月鉾・菊水鉾・鶏鉾・放下鉾などの名称で上とは共通している (図6)。もう一つは、大きな唐傘の頂に趣向の名称でがよって、兵刀鉾・函谷鉾・月鉾・菊水鉾・鶏鉾・放下鉾などの名称でが上げれる。

は鉾の形状であったと考えるのが妥当なのであろう。う名称は頑なに死守している。やはり「鉾」という名称が残る以上は、本来で、祭礼としての風流化が突出して進んでいるといえる。しかし「鉾」とい

反射してきらきら輝き、目立つ存在の鉾でなければならなかったのである。称でも、神社側の「幸鉾」系の鉾とはその機能を異にしたものであり、光をただしその招き寄せる神は、「疫神」である。その意味で同じ「鉾」という名として機能したのである。故に剣鉾を「招き」と称しているところもある。都市住民側の祇園祭で設えた「鉾」は、「山」と同様に神を招き寄せる依代

都市住民側の鉾の登場

七月二十四日条で、時代最末期頃に文献に現れる。最初は『花園天皇宸記』元亨元年(一三三二)神社側の鉾とは違い、都市住民側が主体となって設えた鉾の登場は、鎌

今日去月伏見殿御勝負事負態也 (中略) 即風流渡南庭、是御霊会之儀也。



図7] 綾傘鉾 (同上)

馬長櫛丸過御前、次又召返桙衆施舞曲申、先桙二□、桙衆如恒、次鼓打二騎齇朝臣渡前庭、過御前之間、(中略)次

(裏書) 桙衆参議以下也、

の負態として、彼ら自らが演じたものである。
『清智を表現の記事は祇園御霊会そのものの記事ではない。公家たちの勝負事とある。この記事は祇園御霊会そのものの記事ではない。公家たちの勝負事

表の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次で、『年中行事絵巻』でも、神幸行列を描いた巻九とは別に、巻い合った行列で、『年中行事絵巻』でも、神幸行列を描いた巻九とは別に、巻い合った行列で、『年中行事絵巻』でも、神幸行列を描いた巻九とは別に、巻のがあった。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。 一次の趣向の一つであったのかも知れない。

四日条には、のが、都市民側の鉾であったらしい。同じ『花園天皇宸記』元亨三年六月十のが、都市民側の鉾であったらしい。同じ『花園天皇宸記』元亨三年六月十年(鎌倉時代末期に、神輿渡御とは別のこの風流行列に、新しく加わってきた

物工、御霊会如例、今年馬長無領状之仁(中略)、今日桙衆等群参乱舞、親王見御霊会如例、今年馬長無領状之仁(中略)、今日桙衆等群参乱舞、親王見

> 1.1.5。それでと一緒の風流行列に加わった都市住民たちの桙であったに違そが、馬長などと一緒の風流行列に加わった都市住民たちの桙であったに違とあり、翌日条にも「今日猶桙衆済々参入乱舞」とあり、この場合の桙衆こ

その形状については、同記元弘二年(一三三一)六月七日条に、

相触之故不出音云々、音、只叩鼓許也、是又武家被仰勅答、今日桙等皆以無兵具之由、武家奏聞之、即兵具之由、武家奏聞之、即

では、 前の最中、祭具としての鉾が、 前の最中、祭具としての鉾が、 はているから、傘鉾の形態では なく、都市住民側の鉾も、未だ なく、都市住民側の鉾も、未だ かれる。また、この鉾には皷を 中心にした賑やかな囃子があり、 中心にした賑やかな囃子があり、 中心にした賑やかな囃子があり、 中心にした賑やかな囃子があり、 なの都市住民は地域共同体といるの都市住民は地域共同体といる。

考えたいのである。

おなどで結合した、市中に権利を保有する商業民の集団であった可能性が高いなどで結合した、市中に権利を保有する商業民の集団であった可能性が高いなどで結合した、市中に権利を保有する商業民の集団であった可能性が高い。



[図8] 住吉本『年中行事絵巻』巻十二 祇園御霊会の神幸当日、院や公家衆による馬長稚児を中心とした風流行列(平安時代 12世紀、江戸前期濮写)(京都市立芸術大学芸術資料館蔵)

都市住民側の祇園祭

この祇園祭の風流行列に新しく加わった「鉾衆」の目的は、単なる風流の上がではなく、彼ら自身の論理に基づき、疫神が蔓延する自分たちの生活圏を、あるものでなければならなかったし、疫神が蔓延する自分たちの生活圏を、あるものでなければならなかったし、疫神が蔓延する自分たちの生活圏を、関無く巡行しなければならなかったし、疫神を注目させ、興味を持たせる魅力あるものでなければならなかったし、疫神を注目させ、興味を持たせる魅力をある。その意味で、同じでは、という名称でありながら、中世前期までに神社側の神輿渡御に加わったが、という名称でありながら、中世前期までに神社側の神輿渡御に加わったが、という名称でありながら、中世前期までに神社側の神輿渡御に加わったといえる。

う少し考えておきたい。
じている。ここではそれを参考としながら、「鉾」の成長と形態の変化を、もては、河内将芳氏が『中世京都の都市と宗教』。。で年表を制作して詳細に論都市住民の鉾や山が加わって大きく変貌する南北朝期以降の祇園祭につい

向を競った鉾頭に成長していく過程を、わかる範囲で検証しておく。巡行することに収斂していく。兵具ともされた鉾が、車舞台の上に乗り、趣祇園社氏子圏を中心とした下京(下辺)住民が主役となり、彼らの生活圏内を祇園祭の風流行列は都市住民が中心となり、結局、南北朝期の終わり頃には、室町時代も応仁の乱以前には、公家衆による馬長稚児や歩田楽は姿を消し、

条には「鉾已下如例、文殿田楽、馬長、」とあるから、それらが健在であった日於三条高倉有死人、鉾衆殺害之云々」の記事があり、康永三年六月十四日れたようである。「鉾衆」についても康永元年(一三四三)六月十四日条に「今記述もあるから、祇園祭自体は政治の混乱には巻き込まれずに粛々と執行さむ日条には、「鉾以下以外結構」とあり、十四日条には「文殿田楽、馬長」の七日条には「鉾以下以外結構」とあり、十四日条には「文殿田楽、馬長」の出朝の動乱が続く暦応三年(一三四一)、中原師守の日記『師守記』六月

とあり、初めて文献上に作山・作物が登場している。橋(浮橋)が架橋できなかったが、翌八日には「今日山以下作物渡之云々、」輿奉舁渡河原云々、無為御行、」とあるから、洪水で神輿を渡す四条河原の仮は「今日祇園神輿迎也、定鉾如例、御行酉始云々、依洪水不叶浮橋之間、神ことが知れる。翌年の神輿迎えは雨が降る最中に催行されるが、その記事に

と考えたが、河内将芳氏は「祇園会を見物するということ ―室町期における たようである⁽¹⁰⁾。 之所役、晩頭白河鉾、可入洛之由風聞候、」とあることから、都市住民側が 会、今年山済々、所々定鉾、大舎人鵲鉾」とあり、それをさらに室町期に一 ―」 (3) で、貞治六年(一三六七)に素眼が記した『新札往来』に など住民の側から、 もそれは確かめられる。すでにこの頃には一定の役割を持って、祇園社神人 出した鉾の一つとされた。確かに、以下に出した史料に記される「定鉾」で 定鉾、大舎人之鵲鉾、処々跳鉾、 条兼良が編纂し直した『尺素往来』には「祇園御霊会、今年殊結構、 問題なのは、 雨中の神輿に従った「定鉾」である。 必ず出される鉾が決まっており、それを「定鉾」と称し 家々笠車、風流之造山、八撥、 私はこれを神社側の鉾 曲舞 「祇園御霊 山崎之

祭に出されている。香勤仕之云々、馬長在之云々、」とあって、文殿田楽や馬長稚児とともに還幸日条に「祇園御霊会也、鉾如例、御行亥始、文殿田楽如例歟、御幣掃部頭師康永四年(一三四六)の祇園祭での「鉾衆」の鉾は、『師守記』の六月十四

列は将軍足利義詮が見物している。祇園祭の風流行列にとって、新しい趣向舞車有之云々、作山風流等无之、定鉾許也、」とあるのがそれで、この時の行治三年(一三六四)六月七日条に「今日祇園御輿迎如例、鉾以下冷然、久世やがてこの風流行列のなかに、久世舞(曲舞)車が登場する。『師守記』貞

後の鉾の巡行に利用され、稚児による羯鼓舞や曲舞が演じられていたことが を演じさせるという趣向であった。この趣向のスポンサーになったのは、 前述の『尺素往来』によっても判明する。 に推参して録を賜る慣行は以後も残されている(ロ)。また、車舞台自体は、以 から、一時的なものであったのかも知れないが、奈良の女久世舞師が将軍家 ていたことが知れる。久世舞車に関しては、その後の日記類には登場しない ている。なおこの記事によりそれ以前からすでに傘鉾では 登子が死去した故に、武家方が一切自重したのであろう。久世舞車も中止し 風流等同无之、定鉾許也、」、十四日が「作山一両有之云々、今年笠鷺鉾无之、 翌貞治四年の祇園祭の記事では、七日が「鉾以下冷然、久世舞車无之、作山 行列には、平安時代以来の公家衆から出された馬長稚児・文殿の歩田楽と、 は室町将軍家ではないかと考えている。これによって神輿渡御とは別の風流 である「久世舞車」は、奈良の職業女曲舞座を招聘して、車舞台の上で曲舞 都市住民が主体となった鉾・山に加えて、将軍家の曲舞車が揃ったのである。 (中略) 久世舞車无之、大名不見物云々、」とあるが、この年は将軍義詮の母 もちろん風流行列は、定鉾以外は任意であったから、出ない年もあった。 「鵲鉾」が出され 私

いかと私は考えているのだが、それを証する史料はない。ていたであろう鉾を乗せ、鉾頭がより高く目立つように工夫されたのではな時期はわからないが、この車舞台の屋根に、それまでは人によって差され

家衆が身動きの取れない間に、都市住民を中心とした鉾や作山の風流行列がおり、より盛大なものになっていった。いや、神輿渡御がなく、公家衆や武ら出されなかった。しかしこの間にも鉾を中心とした風流行列は催行されて三七〇)以降、康暦二年(一三八〇)までの十年間中止され、神輿は神社か祇園御霊会の神輿渡御は、比叡山と室町幕府の確執によって応安三年(一

列を桟敷を掛けて見物している。 三七六)六月七日条にも、「下辺鉾并造物如先々渡之、」、十四日条には「高大 会なっていたこと、風流行列の中心が下辺(下京)住民となり、その巡行路も下辺 が月七日条にも、「下辺鉾并造物如先々渡之、」、十四日条には「高大 となっていたこと、風流行列の中心が下辺(下京)住民となり、その巡行路も下辺 が月七日条には、「下辺鉾等如先々渡之、」とあり、『後愚昧記』永和二年(一 六月七日条には、「下辺鉾等如先々渡之、」とあり、『後愚昧記』永和二年(一 大きなものにな

りの歴史と鉾の機能について考察してきた。その結果、中世前期までの祭礼 ことと、人間が差さなくなったことによって、鉾頭が自由な意匠のデザイン 側が調進したものとして区別した。 り代としての機能を利用して、疫神を集めるための神座として、都市住民の に出された鉾が、祭儀の庭や、神輿渡御の道を祓い清めるなど、悪霊を払う 在となったのである。ただし鉾頭は、疫神の注意を惹くために、きらきら輝 倉時代最末期に、風流行列として登場する鉾は、鉾が本来持っていた神の依 兵具的機能を残した祭具であり、 いて揺れなければならないという本来の原則は、今日なお堅持している。 になったことで、以下に記す鉾が出る祭りのなかでも、飛び抜けて特異な存 は措く。ただ、鉾が車舞台の屋根に乗せられ、より大きく、より高くなった 大きく変貌を遂げるのだが、その間の詳細は河内氏の研究(コ゚に詳しいので今 行列は、室町時代に入り応仁の乱による約四十年間の中止期間はあるものの、 以上、京都の鉾が出る祭りを代表する祇園祭の歴史を通じて、鉾が出る祭 都市住民の側が、疫神を集めて送り出すことを目的に催行した山鉾の風流 神社側が調進したものであるのに対し、鎌

疫神の注目を惹くという目的故に、より輝き、より高い鉾で、風流の要素を「京都の鉾の祭り」といった場合、この後者の鉾を指すのだが、この鉾は

最適な鉾の形状が剣型であり、一番差しやすく、目的に叶ったのであろう。要があり、鉾の形状はシンメトリックであることが要求された。その結果、より反射させ輝かせるために、薄い金属に鍍金を施した。また生活圏を隈無必要とした。形態も先の尖った兵具的な「幸鉾」系統の形状ではなく、光を必要とした。形態も先の尖った兵具的な「幸鉾」系統の形状ではなく、光を

五 祇園社以外の大社における鉾の出る祭り

いて検討しておきたい。神院以外で、平安時代から京都に鎮座し、御霊を祀った大社の祭礼の鉾につ神院以外で、平安時代から京都に鎮座し、御霊を祀った大社の祭礼の鉾につ頭天王)を祀る系統の神社が主流であるのだが、その前に、祇園御霊社(祇園感本来この「剣鉾」を使用する祭りは、疫神を退治する神である素戔嗚尊(年本来この「剣鉾」を使用する祭りは、疫神を退治する神である素戔嗚尊(年

稲荷祭の山鉾

るから、その最中に、御霊を慰撫する祭祀も同時に行ったことになる。 (一〇九四) 四月九日条に記される「稲荷御霊会」である。『中右記』嘉保元年 瞬とはじめ、公式の祈念に勅使が使わされる神社となっていた。しかし平安 願をはじめ、公式の祈念に勅使が使わされる神社となっていた。しかし平安 願をはじめ、公式の祈念に勅使が使わされる神社となっていた。しかし平安 原道真の霊であったようだが、稲荷祭は四月の上卯日の還幸祭が中心であるから、その最中に、御霊を慰撫する祭祀も同時に行ったことになる。 るから、その最中に、御霊を慰撫する祭祀も同時に行ったことになる。 福荷神社 (現代見稲荷大社) の祭神は御霊ではない。もともと稲荷山山麓に居

中の御旅所へ渡御する。また、公家たちによって華美を競う馬長稚児も調進稲荷祭は、祇園御霊社の祭礼と同様に、盛大なる祭礼で、五基の神輿が洛

鉾の類は出ていない。 されており、神輿渡御の行列は『年中行事絵巻』巻十一にも描かれているが、

しかし、祇園祭より大分遅れはするが、室町時代に入ると稲荷祭でも山鉾の巡行が催行されていた。『師郷記』嘉吉元年(一四四一)四月十三日条に「今の巡行が催行されていた。『師郷記』嘉吉元年(一四四一)四月十三日条に「今日稲荷祭、風流造構如祇園会、」とあるのがそれである。この時の稲荷祭は『東吉和たようである。翌年の稲荷祭も「山鉾五十色有之、」とあり、行列の行くとあったようである。翌年の稲荷祭も「山鉾五十色有之、」とあり、行列の行くとあったようである。翌年の稲荷祭も「山鉾五十色有之、」とあり、行列の行くとあって、摂関家の二条殿をはじめ多くの見物人が集まったようである。まとあって、摂関家の二条殿をはじめ多くの見物人が集まったようである。まとあって、摂関家の二条殿をはじめ多くの見物人が集まったようである。まとあって、摂関家の二条殿をはじめ多くの見物人が集まったようである。まとかし、祇園祭より大分遅れはするが、室町時代に入ると稲荷祭でも山鉾とあったがし、祇園祭より大分遅れはするが、室町時代に入ると稲荷祭でも山鉾とあったがし、祇園祭より大分遅ればするが、室町時代に入ると稲荷祭でも山鉾とあったがした。

当時の神輿渡御の順路ははっきりしないが、基本的には旧暦三月二の午日当時の神輿渡御の順路ははつきりしないが、基本的には旧暦三月二の午日当時の神輿渡御の順路ははつきりしないが、基本的には旧暦三月二の午日当時の神輿渡御の順路ははつきりしないが、基本的には旧暦三月二の午日当時の神輿渡御の順路ははっきりしないが、基本的には旧暦三月二の午日

有之、」とあるのがそれである。囃子物(拍物)を演じた東九条はもちろん氏翌三年三月十四日条に「稲荷御出之、ホク廿本斗有之、東九条ヨリハヤシ物寺執行日記』嘉吉二年三月二十一日条に「稲荷御出、山ホクニ廿七色有之、」、もっとも山鉾の風流行列は、規模は小さいが神幸祭にも出されている。『東

子圏内の住民である。

稲荷祭の山鉾に関しては以後史

氏子圏の住民が、華やかな風流行 祭の日に「お迎え提灯」と称して 全くないが、江戸時代後半、神幸 可能性がある。剣鉾などの残存も 料がなく、応仁の乱によって中止 を余儀なくされ、復活しなかった

列を行っている。剣鉾こそ出ないのだが、 の住民側の風流行列の系譜を引いた行事と考えられる。 作山はあり、 これなどが室町時代

北野天満宮の鉾

所収の明徳二年(一三九一)八月三日付「三年一請会引付」に「一、其後 個人の霊であり、疫病を都にもたらす御霊とは、性格を異にするはずである。 野社祭礼が四日、翌五日が御霊会とされ、以後も御霊会は盛大に執行された 御鉾参之後神輿神幸、保々御鉾如先々参、」とあり(≒)、南北朝期最末期には、 として頗る古典的であるが、鉾は描かれていない。ただし、『北野天満宮史料』 後に神輿が舁かれている。この形態は、いわゆる神社側が主催する祭礼行列 行列では、師子舞を先頭に王の舞・田楽衆・楽人・巫女の姿が描かれ、その 描かれたと思われる『北野天神縁起絵巻』(図9) の巻末近くに描かれた祭礼 ようである。しかしこの御霊は、藤原氏や朝廷に災いをなす菅原道真という とされるが、朝廷から奉幣があったのは永延元年(九八七)で、この年から 八月五日を祭日とした官祭が執行された。 菅原道真の御霊を祀る北野社(北野天満宮)の創建は、天暦元年(九四七) 古代・中世の北野祭や御霊会についての詳しい記録はないが、中世末期に 永承元年(一〇四六)からは、北



[図10] 鉾(室町時代, 北野天神社伝来) (耕三寺博物館蔵)

う。 等渡侯、 導する「幸鉾」系の鉾であり、 輿が出せなかったというから、 北野神社運営に必要な税を課すために儲 神幸在、」とあることでも、この鉾が御輿 神幸事、(中略) 先師子・田楽・西京御鉾 文安三年(一四四六)八月一日条に「御 せられていたことになる。『北野社家日記 が西京の地域住民(氏子)に所役として課 として出されるこの鉾は、御輿渡御を先 たのである(゚゚゚。それも一鉾が来ないと神 けられた「保」単位に、鉾が出されてい 渡御にともなう鉾であったことが知れよ (中略) 西京鉾之衆舁手撰、 その役目 保を単位 戌剋

この時代の鉾ではないかと考えられる 広島県尾道市の耕三寺博物館に所



は下るようだが、室町時代の神社祭礼に出された鉾である可能性がある。 や類似する。用途は幸鉾系であったと思われるのだが、鉾先が剣型になるこたや類似する。用途は幸鉾系であったと思われるのだが、鉾先が剣型になるこたや、鉾身の装飾が象嵌ではなく毛彫りであることなどの違いがあり、時代をや、鉾身の装飾が象嵌ではなく毛彫りであることなどの違いがあり、時代を、鉾身の接合部に北野社の社紋である梅鉢紋の金具が付随し、先に挙げた『駒競蔵されている(図10)。鉾は二本所蔵されているが、そのうちの一本が、鉾と

鉾の形態を真似て新造した鉾が伝来したとも考えられる⁽¹⁾。 対の形態を真似て新造した鉾が伝来したとも考えられる⁽¹⁾。 様の形態を真似て新造した鉾が伝来したとも考えられる⁽¹⁾。 様の形態を真似て新造した鉾が伝来したとも考えられる⁽¹⁾。 様の形態を真似て新造した鉾が伝来したとも考えられる⁽¹⁾。 (『北野天満宮史料』所収)に、「一、十月朔日夜、外遷宮在、(中略) サシツクへ弐本・天ガイ・御鉾弐本、何モ若キ衆持申候也、」とある。この鉾も機能的には本・天ガイ・御鉾弐本、何モ若キ衆持申候也、」とある。この鉾も機能的には本・天ガイ・御鉾弐本、何モ若キ衆持申候也、」とある。この鉾も機能的には、慶長本・天ガイ・御鉾弐本、何モ若キ衆持申候也、」とある。この鉾も機能的には、慶長本・天ガイ・御鉾弐本、何モ若キ衆持申候也、人を図りた。

御霊神社の山鉾

初であろう。
初であろう。
一世には、朝廷によって催行された御霊会の中心は、御霊神社で神社名からすれば、朝廷によって催行された御霊会の中心は、御霊神社であるのは。
「神社名からすれば、朝廷によって催行された御霊会の中心は、御霊神社で神社名からすれば、朝廷によって催行された御霊会の中心は、御霊神社で

せた堂のなかに、祇園天神堂とともに「上出雲御霊堂」がある。この御霊堂五月十七日の弁官下文に、疫病の流行により僧を派遣して、仁王経を転読さしかし本多氏も書いているように、『類聚符宣抄』所収の天徳二年(九五八)

自身が、当時災いの原因とされた御霊を慰撫するために建立された堂に違いないのである。

に登場しない。

「登場しない。

「登場しない。

「会に、

でのがそれである。

しかし上出雲寺は、

天皇死後の法要を行う大寺としては

である。

しかし上出雲寺は、

天皇死後の法要を行う大寺としては

に登場しない。

「会間、

会日出雲寺御霊会」とある。

とある。

は歌会自体は、本来仏教法会であるから、出雲寺で催行されていた。
『小右

朝廷が御霊八柱を慰撫するために祀った出雲御霊堂の法会は、平安時代後

いたのである。

いたのである。

いたのである。

に対し、上京では鎌倉時代初頭に、彼らの祀る辻祭りとして始められてる前に対し、上京では鎌倉時代初頭に、彼らの祀る辻祭りとして始められての辻祭りとして再興されたのである。もちろんその目的は、都市に流行するあのに対し、上京では鎌倉時代初頭に、彼らの祀る辻祭りとして始められてされる。下京の商工民が結束して疫神送りを始めるのが、鎌倉時代に入ると、今度は上京の都市住民期に一時退転したようであるが、鎌倉時代に入ると、今度は上京の都市住民

ある。 ただしその形態は鉾による疫神送りではなかった。『明月記』寛喜二年(一ただしその形態は鉾による疫神送りではなかった。『明月記』寛喜二年(一ただしその形態は鉾による疫神送りではなかった。『明月記』寛喜二年(一ただしその形態は鉾による疫神送りではなかった。『明月記』寛喜二年(一ただしその形態は鉾による疫神送りではなかった。『明月記』寛喜二年(一

地域であったからではなかろうか。 地域であったからではなかろうか。 鎌倉時代を通じて、相当に華やかな風流をともなった神輿行列として催行され、上辺に居住する公家たちも桟敷を儲けるなどして見物しているが、御霊鎌倉時代を通じて、相当に華やかな風流をともなった神輿行列として催行さ、鎌倉時代初頭、上辺の都市住民によって辻祭として催行された御霊祭は、

上辺を中心に神輿が渡御する形態であったという両者の違いは、すこぶる重代以降の御霊(社)では、上辺の都市住民による御霊祭が催行されたものの、時代の信仰者側が風流の行列を仕立てて巡行した祇園御霊会に対し、鎌倉時 各時代の政権によって庇護されて、盛大な神輿渡御と、それとは別に、各

要である。

御霊社の御霊会に、鉾が登場するのは室町時代に入ってからずる。山科教言の日記『教言の別記』を言いる。山科教言の日記『教言の別』を表示のは室町時代に入ってからずるのは室町時代に入ってからずるのは室社の御霊会に、鉾が登場

二社、小門ヲ開教豊以下輩ニ神幸、鉾三十余本、神輿の。此北小路ヲ下

神輿行列であると思われるが、 連鴻しているから、上御霊社の 関が北小路 (今出川通) を下がっ 関が北小路 (今出川通) を下がっ 関が と記されるのが最初である。神

三十余本の鉾は二基の神輿渡御

絵巻の画題を、京都上京の秋(旧暦セ・ハ・ヵ月)の行事を描いた十五世紀中頃前田育徳会が所蔵する『祭礼草紙』に関する論考があるが、そのなかでこの近年、泉万里子氏が著した『中世屏風絵研究』所収の「祭礼草紙」(ビ) には、

[図 11] 『祭礼草紙』より御霊祭(室町時代 15世紀、重文)(公益財団法人前田育徳会蔵)

流行列としている の景観を描くと考察し、その中心部を占める祭礼行列 (図11)を、 御霊祭の風

版には登場しないが馬長稚児が三騎曳き出されているのも注目される。 描かれることから考えて、上京が応仁の乱に巻き込まれていた時期の祭礼な 外に小さく兵具なみの幸鉾である。 笠も人の頭に載せる笠の上に山 を挿す)を三つ作り、山の前に趣向のある場面を人形で表現している。掲載図 し神輿は描かれない(゚゚)。この絵の鉾持ちは鎧を着けており、長刀持ちなども 私もこの説には賛成なのだが、となると行列のあちこちに散見する鉾は意 (頂に小枝

のであったとも考えられる。 どとも考えるのだが、 その意味で貴重な絵画資料で の山とか鉾は、この程度のも 乱以前の都市住民による風流 い祇園祭は別として、応仁の 規模の

中断し、明応六年(一四九七) は大きな変化があったようで らうとして、復活以降の鉾に るから、それらを参照しても 多氏が詳細な検証を行ってい 以後の御霊祭については、本 に神輿渡御が復活するのだが 御霊祭は、応仁の乱で一時 十六世紀前半の制作と

[図 12] 『京洛風谷図扇面』(室町時代 16 世紀前半)(出光美術館蔵)

に狩野永徳が描き終えたという米沢市上杉博物館蔵の『洛中洛外図屛風』図 注目されるのである。 するという機能はそのままに、疫神を集めて廻る剣鉾へ変化していることが の鉾は、神輿渡御の前方を行く幸鉾的機能であったはずが、神輿渡御を先導 ている。『京洛風俗図扇面』では鉾が撓む様が描かれるように、本来、 13) などでは、現在の鉾の差し方と同様、 される出光美術館蔵の『京洛風俗図扇面』 (図 12 や、 人が帯を使用する差し方で描かれ 永禄八年 (一五六五)

鉾の形態の変化の時期などはわからないが、近世には禁裹六町組に属した



[図 13] 上杉家本『洛中洛外図屏風』 16世紀中頃 国宝) 室町時代 (米沢市上杉博物館蔵)

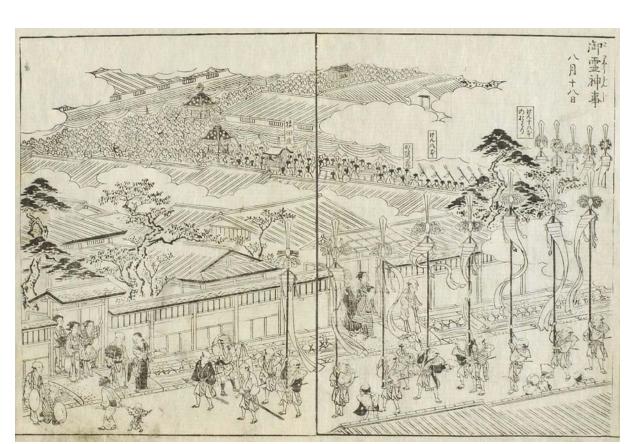
皇より寄付されたものという伝承が残る。下御霊社の場合、古い伝承のあろ 鉾を出す氏子町が、秀吉によって神社が現在地(寺町丸太町下心)に移転させら が、永享七年後花園天皇拝領、讃州寺町の出す扇鉾が文明年間に後土御門天 皇寄付の伝承なら頷けなくはない。下御霊社も同様で、大門町が出す石竹鉾 れる以前の、 るとしても、武者小路町より出す蓬莱鉾の文明二年(一四七〇)後土御門天 る龍鉾は、永享三年(一四三一)後花園天皇より拝領とされる。『祭礼草紙 今出川町が、鉾組の組織を作って奉持していた(゚タ) 太刀鉾には、永仁二年 一九四)に伏見天皇から拝領したという伝承があり、現在の今出川町が奉じ (図11) に描かれた御霊祭からすれば、応仁の乱以前とする年号には疑義があ 中世期の氏子圏の町々であることから考えて、それなりの説得

な山も各町から出されていた。『資勝卿記』元和七年(一六二一)一八日条に、 なお、江戸時代初頭の上御霊神社の場合、 鉾のみではなくて祇園会のよう

其内祭ノ御供ノ者渡、一番に柳原口ノ者渡、種々衣裳出たち共也、せい スキ・クワ・カサニモユキツクル也、 わし町、雪コロハカシノ山也、 マキヲニツつゝ付候也。大ホコアマタアリ、ホコ六本アリ。 山の内にてハヤシ物祇園会と同、先前 山ひき、白帷子ノセナカニハツレ

とあり、多数の大鉾と六本の鉾とを区別している。

が八本(コン 差し鉾である剣鉾が八本出されたというのである。また下御霊社 は「有勢力人建鉾、 れを担う形態 出御の時に、「幸鉾八本、祭鉾八本」が出され、幸鉾は床の上に建て四人がこ 江戸時代の鉾については『日次紀事』は、上御霊社では神輿二社が本社を (担い鉾・舁き鉾)で、この鉾は神宝であるとする(3)。また祭り鉾 於帯間以両手之」とする。結局、一本を四人で担う幸鉾



しまっている。

都市住民が調進した鉾は、

の意匠を競う特殊な鉾に変化してなく、車舞台の屋根に乗せ、鉾頭

や形態には変化があったようであるが、それについては後述する。 では神輿出御の時に「鉾五本」が出され別当・氏子・雑色が供奉するとある。 では神輿出御の時に「鉾五本」が出され別当・氏子・雑色が供奉するとある。 では神輿出御の時に「鉾五本」が出され別当・氏子・雑色が供奉するとある。 では神輿出御の時に「鉾五本」が出され別当・氏子・雑色が供奉するとある。

今宮神社の鉾

れたものと思われる。 うから⁽²⁾、この社の御霊会も本来は五月九日を式日とする官祭として始めら疫病流行を機会に、紫野に社殿と神輿が創建され、今宮神社と号されたとい平安時代前期、紫野や船岡山で行われた御霊会は、長保三年(一〇〇一)

の乱で大きな被害を被ったこの地域では、その復興が遅れ、氏子の地域集団脚迎□」とあるのが早い。この地の氏子には後の西陣を形成する織り手集団大四日条に「今宮祭礼也、有鉾、」とはあるのだが、この史料以外には記事があった。今宮神社の祭礼の鉾は『康富記』応永二十九年(一四二二)五月があった。今宮神社の祭礼の鉾は『康富記』応永二十九年(一四二二)五月本四日条に「今宮祭礼也、有鉾、」とはあるのだが、この史料以外には記事があいので、どのような状態であったかはわからない。もし他地域の御霊や疫ないので、どのような状態であったかはわからない。もし他地域の御霊や疫ないので、どのような状態であったかはわからない。もし他地域の御霊や疫ないので、どのような状態であったかはわからない。もし他地域の御霊や疫ないので、どのような状態であったかはわからない。もし他地域の御霊や疫ないので、どのような状態であったかはわからない。もし他地域の御霊や疫ないの乱で大きな被害を被ったこの地域では、その復興が遅れ、氏子の地域集団を設める場所を関係の大社同様に、今宮社でも鉾の祭りが執行されていたとしても、応に関係の経緯は前述の本名といるといる。

剣先を輝かせて人が差す様式ではために曳き出した鉾は、早くから

のだが、下辺住民が疫神を集める

が調進する鉾は、近世に入ってからだとする本多氏の説には一理がある。

、撓む鉾、撓まない鉾

私はこれまで悪霊を祓うことを目的に、神輿渡御などに神社の側が準備-

掲載不許可

| 図 15] 『祭礼草紙』に描かれたささ神輿の図(室町時代 15世紀、重文)(公益財団法人前田育徳会蔵)

ら。 を考証した、『祭礼草紙』の最後に載る「貴船のささ神輿」の図(図15)であ唆する絵画資料はある。泉万里子氏が応仁の乱以前の上京の秋の祭礼を描くをれを確実に証明する史料が見つからないのである。ただしその可能性を示朝後期には、金色に鍍金した薄い剣先型の鉾になっていたと確信しているが、朝後期には、金色に鍍金した薄い剣先型の鉾になっていたと確信しているが、

いている。まさしく剣鉾の姿である。 この行事は、旧暦九月九日を中心に、上京の子供たちによって行われた習に小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付は小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付は小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付は小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付は小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付は小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付は小皷で囃す子供が描かれる。その鉾も撓みのある剣先型で、飾り金具も付いている。まさしく剣鉾の姿である。

「貴船のささ神輿」という行事は、上京に疫病が大流行して多くの子供たちが死んだ時、その原因は貴船神社の奥院に祀られる素戔嗚尊の祟りとされたことで、以後、子供たちがこの神を小さい(狭小)神輿に奉じて舁き廻る行事を始めたとされる。私は『日次紀事』に「後奈良院ノ時、一年九月小児疫痛大二行ル、是称貴船神ノ祟ト、各造小神輿舁之而勤神行、故至今然也、相底貴船奥院則素盞嗚尊也、」とあることから、この行事の始まりを後奈良院の伝貴船奥院則素盞嗚尊也、」とあることから、この行事の始まりを後奈良院の活出に、 「貴船のささ神輿」という行事は、上京に疫病が大流行して多くの子供たちが死んだ時、その原因は貴船神社の奥院に祀られる素戔嗚尊の祟りとされた。 「貴船のささ神輿」という行事は、上京に疫病が大流行して多くの子供たちが死んだ時、その原因は貴船神社の奥院に祀られる素戔嗚尊の祟りとされていたのさる。

永十三年には疫神を集めるための依代として差されていたことになる。となすなわち、『祭礼草紙』に描かれた如く、剣先型で飾り金具のある鉾が、応

せて差しているのである。 標となるために、わざわざ鉾を撓まえることも無理ではない。疫神の目のであるために、わざわざ鉾を撓がれば、この型の鉾 (剣鉾) がさらに遡れば、この型の鉾 (剣鉾) がさらに遡

だからといって現在に残る剣鉾の 祭りが、すべて疫神集めを目的とし 条りが、すべて疫神集めを目的とし た鉾であるかというと、そう簡単で はない。たとえば、高野川の谷筋に はない。たとえば、高野川の谷筋に 位置する長谷・花園・中の三村の鎮 守であった長谷八幡社の祭礼には、 現在三本の鉾が出されており、各村 単位で一本宛出されたという。その うちの扇鉾には、正保三年(一六四 うちの扇鉾には、正保三年(一六四 た)という年号が刻まれる。現在年 おが確かめられる鉾では最古に属す る鉾である。

は三つかい、しし舞、御供子、御供、幡の祭礼について、「ほこ五本、けい四八五)八月十五日条には、長谷八四八五)八月十五日条には、長谷八四八五)の「兼致卿記」文明十七年(一

七五四)の『山城名跡巡行志』に「例祭八月十五日、神幸巳刻、競馬・翁舞、を集めるための鉾と考えていた。しかし、ここの祭礼について宝暦四年(一御供餅酒在之、」とある。私は以前の論(゚゚)で文明十七年の鉾の記事を、疫神



「図 16]『付雲越鈴巻』(室町時代成立、江戸時代の模本)(京都大学付属図書館

の祭礼行列にともなって出された鉾ではないかと考えるようになった。神輿一基、」と記されていることなどを勘案すると、この鉾は本来、神輿渡御

機能はなかったと思うのである。この神社の鉾の場合、疫神を集めるというのではないかと考えたのである。この神社の鉾の場合、疫神を集めるというに出されていた鉾を華やかな剣鉾に代え、氏子の村単位で出すようになった 剣鉾が一般的になったある時代 (もちろん正保三年以前)、古くからの神輿渡御

は、撓む鉾と撓まない鉾の両方が登場している。期の成立ではないかといわれる『付喪神絵巻』(京都大学付属図書館蔵)(図16)に期の成立ではないかといわれる『付喪神絵巻』(京都大学付属図書館蔵)(図16)に 京都の剣鉾の祭りには、撓む鉾と撓まない鉾が併存している。原本が室町

が出るとされたところは以下の神社である。
江戸時代前期、京都の祭礼を日次で記した黒川道祐の『日次紀事』で、鉾

一村、出鉾一本、各聚広隆寺門前、自是供奉、四月初酉日 太秦広隆寺鎮守木島明神祭、凡太秦七箇村此氏子也、故毎

六月十五日 吉田西天王神事、神輿一基有鉾五本、五月十五日 紫野今宮祭、神幸日有鉾十弐本、凡出鉾之町在処々

下御霊社神輿亦同時出拝殿。鉾五本、一次、又有膂力人建鉾於帯間、以両手棒持之而行、是謂祭鉾、(中略)、以本、凡建鉾於床上以棒二本四人荷之者、謂幸鉾。是神宝内特尊崇八月十八日(上下御霊会。午後神輿二社出中御霊離宮、幸桙八本、祭鉾

処、各神輿一基、鉾一本^(x)、 前祭・永観堂門前天王祭・光雲寺門前祭・城口祭、右自鹿谷以下七九月九日 東山鹿谷大豊明神祭・若一王子村祭・南禅寺綾戸廟祭・同門八月二十四日 東山吉田木瓜大明神祭、後土人棒鉾五鉾而前駆、

九月十三日 北白川東天王祭、有神輿一基、鉾五本、

院之三字、疑旧感神院之鉾乎、剣下以埴造鷹二連・猟犬一疋、施彩色、是謂犬鷹鉾、其傍雕刻感神九月十六日 東岡崎正一位東天王祭、神輿一基、有鉾七本、其内一本鉾

九月二十八日 鳴瀑福王子祭、神輿一基、鉾五本、入仁和寺門主庭、

記されている。 一世にも黒川道祐は紀行文である『東北暦覧記』に延宝九年(一六八一)九 一世にも黒川道祐は紀行文である『東北暦覧記』に延宝九年(一六八一)九

須賀神社)の鉾については、『兼右卿記』天文二年(一五三三)六月十五日条に、四四一)には存在したという伝承がある(『華頂要略』)。さらに吉田西天王社(現とある白河鉾と関係があろうし、下栗田口天王社の阿古多鉾は、嘉吉元年(一た。『尺素往来』の祇園御霊会の記事に、「晩頭白河鉾、可入洛之由風聞候、」たまれらの鉾の出る祭りのうちの多くは、中世後期までは遡ると考えてよいこれらの鉾の出る祭りのうちの多くは、中世後期までは遡ると考えてよい

鼓鉾ハ天皇廿五御前へ降臨鉾也(中略)聖護院衆祭了、その衆にも鉾二つ今日天皇祭也、石原衆・番匠衆各祭了、石原衆鉾、番匠衆扉文也、此天

られていたようである。 とあるように、吉田周辺の石原衆・番匠衆や、聖護院村の鉾仲間によって祀

ることを標榜していることが注目される。
も、東岡崎天王社(現岡崎神社)にしても、祇園感神院(現八坂神社)の新院であこの鉾にも「感神院新宮」の刻銘がある。粟田口天王社(現粟田神社)にしてこの鉾にも「感神院新宮」の刻銘がある。粟田口天王社(現粟田神社)にしてなお現存品としては永享十年(一四三八)という、飛び抜けて古い年号のなお現存品としては永享十年(一四三八)という、飛び抜けて古い年号の

もちろん今回の調査では市内で五十四ヵ所の剣鉾の祭りが対象となっており、鉾の数も夥しく存在している。しかし、これらの剣鉾のすべてが疫神を集めるという目的で出されるのではなく、本来神社の神輿渡御に出されていた鉾が剣鉾に代えられた場合も多かったに違いない。この場合は鉾が撓む必要がないから、剣の部分が短く厚手であっても問題はないのである。とくに要がないから、剣の部分が短く厚手であっても問題はないのである。とくに京都盆地西部の農村部では、江戸時代前期に村の経済力が向上するに従い、京都盆地西部の農村部では、江戸時代前期に村の経済力が向上するに従い、京都盆地西部の農村部では、江戸時代前期に村の経済力が向上するに従い、京都盆地西部の農村部では、江戸時代前期に村の経済力が向上するに従い、京都盆地西部の農村部では、江戸時代前期に村の経済力が向上するに従い、京都盆地西部の農村部では、本来神社の網路の祭りが対象となっており、鉾の数も繋とびて、独自な剣鉾の祭りに発展させた。梅ヶ畑の平岡八幡宮、上嵯峨野の愛宕野々宮神社、鳴滝(宇多野)福王子神社などがそれである。

礼ではないであろうか。

、『東北暦覧記』に記される浄土寺村の氏神山王十禅師宮(現八大神社)の祭姿になったのが、『日次紀事』が記す太秦七ヵ村の氏神木島明神(現木島神社)姿になったのが、『日次紀事』が記す太秦七ヵ村の氏神木島明神(現木島神社)をになったのが、『日次紀事』が記す太秦七ヵ村の氏神木島明神(現木島神社)を派が、剣鉾に置き換えられ、氏子圏の村が鉾仲間を作って一本宛出すというまた長谷八幡宮の例を挙げたように、本来は神社側の神輿渡御に出されたまた長谷八幡宮の例を挙げたように、本来は神社側の神輿渡御に出された

て、見物に鉾差しの技術を楽しませるためであったはずである。は、必ずしも撓む必要はなく、撓ませたとしても、それは本来の意味を忘れ鉾を氏神祭りに参加させた地域も多かったに違いないが、それらの鉾祭の鉾もちろん江戸時代の中期以降近代にかけて、鉾仲間を作り、新しく豪華な

差しの一人は鉾を肩の上に乗せる曲差しを見せている(図17)。『伊勢参宮名い祭りの要素が加わったようで、前掲した『拾遺都名所図会』の御霊祭の鉾江戸時代後期になると、見物衆が鉾差しの技術や曲技を楽しむという新し



19 世紀初頭) (早稲田大学図書館蔵)



[図 17] 前掲『拾遺都名所図会』 より、剣鉾を肩の上に乗せる曲差し

られてきた(2)。 歴史的には、 持されていたようである。現在の調査によってもその形態の概略は探れるが 葉矛始而御輿之御供ニ加へ申之儀也、」と記されており、この頃新しい鉾を作 頭人による振る舞いがあったことが知れる。なお、同記元和二年(一六一六) 江戸時代に入って『舜旧記』寛永五年六月十五日条には「西天王神事依触穢 れた吉田西天王社(現須賀神社) に住む「鉾仲間」とも称すべき、 の鉾祭も、その始原はわからないが、 八月十五日条(w) には「西天王御神事 一方、先に『日次紀事』から取り出した牛頭天王を祭神とする都市周縁部 但鉾之頭役者振舞已下執行、」とあり、ここでも頭屋制度が確立し、 前掲の『兼右卿記』天文二年(一五三三)六月十五日条に記さ の、石原衆と番匠衆(天鼓鉾)がそれであり、 一種の宮座仲間による頭屋制度によって維 (中略) それらの鉾を維持したのは、 次御祭始、 次矛二本、農人矛・梶 氏子圏内

る動きがあったらしい。そういえば粟田神社の鉾や御霊神社の鉾など、この

持」をするのが慣例で 様な曲差しが行われ、 (図18)、また「白川橋三条ノ南」 観客を沸かせたと「華頂山略記」に残されている。 一町余南三本橋」でも

所図会』によると、粟田口天王祭では白川にかかる一本橋の上で鉾差しが「曲

期にはその多くは職能集団であったらしいのだが、

鉾調進の経済的負担する集団が結成された。

し、それが復興して以降は、

下京の地域的町共同体に定着していったと考え

応仁の乱により一時中絶

祇園祭の場合、

合は別として、都市住民の側から疫神を集めて追い払うことを目的に調進す

北野天満宮のように神輿渡御に出される鉾が、氏子圏内の所役とされた場

鉾を維持する人々と、鉾を差す人々

多くある。 時代に新しい鉾を貴人から拝領したり新造したりしたという伝承を持つ鉾が

平也、」とある。

『日次紀事』が八月二十四日を祭日として記す吉田木瓜大明神の祭礼は、『日次紀事』が八月二十四日を祭日として記す吉田木瓜大明神の祭礼は、『日次紀事』が八月二十四日を祭日として記す吉田木瓜大明神の祭礼は、『日次紀事』が八月二十四日を祭日として記す吉田木瓜大明神の祭礼は、来也、」とある。

江戸時代においては、大部分の剣鉾が鉾仲間の頭屋制によって維持されて江戸時代においては、大部分の剣鉾が鉾仲間の頭屋制によって維持されている、一之鉾講中にはずで、その記録は各所に残る。たとえば旧浄土寺村では八神社の祭礼に三本の剣鉾を出すが、その鉾は講中によって維持されており、一之鉾講中に三本の剣鉾を出すが、その鉾は講中によって維持されており、一之鉾講中に三本の剣鉾を出すが、その鉾は講中によって維持されており、一之鉾講中に正本の剣鉾を出すが、みの鉾は講中によって維持されている文書が保存され、頭渡しが行われていた。

Revo. での住屋西村家の一統によって保持されていた鉾もあった (『華頂要惠 など、さほど大人数ではない。栗田口天王社 (現票H神社) の地蔵鉾のよう西天王社 (現質神社) の山王講は嘉永六年 (一八五三) 段階で小兵衛以下七名。王社 (現岡崎神社) の山王講は嘉永六年 (一八五三) 段階で小兵衛以下七名。東天との他剣鉾を納める箱などに、鉾仲間の氏名が記される場合もある。東天

間や頭屋制度による氏子中の者ではなかった。 で決めて練習し、交替で差したに違いないのだが、都市部や東山周辺部の牛を決めて練習し、交替で差したに違いないのだが、都市部や東山周辺部の牛を決めて練習し、交替で差したに違いないのだが、都市部や東山周辺部の牛を決めて減過鉾を実際に差すのは、誰が担ったのであろうか。先述した京

差シ三人」とあるのが目に付く程度である。 「蓬莱御鉾目録 附鉾精算簿」の明治三十九年分に「一、金壱円五拾銭 鉾呂町が当番であった時の算用状に「一、同三拾銭 鉾指祝儀」とあるのと、記録には出てこない。近代に入って以降、御霊神社の「矢的鉾記録」の柳風配録を差すことを得意とした専門家があり、その年の当番である頭屋の責

辺、印地と称し結党の悪徒有り、まづ件の輩を誡め、其上制法に拘はらずば、り、そのなかに「風流の過差・飛礫は一向に停止に従へ。又白河の薬院田の出された「公家新制」は、諸社祭礼の風流や供奉人衣装の過差を停止してお団がいたらしく、鎌倉時代の弘長三年(一二六三)八月十三日付で朝廷から「白川の地には古くから「白川者」とか「白川衆」と呼ばれた一種の職能集

その人并縁者に懸けて、交名を注進す可し、」とあり、白川の薬院田付近⁽³⁾ その人并縁者に懸けて、交名を注進す可し、」とあり、白川の薬院田付近⁽³⁾ ともいわれてきたのである。それ故に京中無頼の徒とも、その末裔だが買われて動員されたようである。それ故に京中無頼の徒とも、その末裔だが買われて動員されたようである。それ故に京中無頼の徒とも、その末裔だともいわれてきたのであろう。

(はあるようである。 にはあるようである。 には一条地にはあるようである。 には一条地には一条地の大り がいらにであるが、 には一条地の大り がいらにであるが、 での三段目が通称「菊畑」で、鬼一法 はいうのがこの芝居の筋なのだが、 白川衆が花を中心としたある種の園芸業 というのがこの芝居の筋なのだが、 白川衆が花を中心としたある種の園芸業

その関係で梵舜が白川村衆と懇意にしていただけなのかも知れない。 「還幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女同道也、」という『遠幸之御神事、例年客人衆、白川衆、サシ物久右衛門息女には、大川神祭に関して、神神等に関して、神神等に関して、大田神等、大田神等に関して、大田神等とは、大田神等に関して、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対し、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等を、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に対し、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対し、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対して、大田神等に対し、大田神等に対し、大田神等に対して、大田神等に関する、大田神等に対して、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対は、大田神等に対しが、大田神等に対しが、大田神等に対は、大田神等に対対は、大田神等に対対は、大田神等に対対は、大田神等に対対ないが、大田神等に対はなりが、大田神等に対しが、大田神等に対は、大田神等に対は、大田神等に対対は、大田神等に対は、大田神神等に対対は、大田神等に対は、大田神等に対は、大田

が現状である。

まとめにかえて

られた結果、疫病流行の原因を御霊の祟りと考え、その慰撫のために、あち安京では、都市を支配した朝廷をはじめ権力者の側で、この問題の対処に迫他の都と異なり、梅雨の時期に人々の生命を脅かす疫病の蔓延に悩んだ平

させて、祇園御霊会を定着させた。
あげたようで、わが国の神々のうち、疫神退治の伝承がある素戔嗚尊を習合で、祇園精舎の守護神である牛頭天王を祀った祇園感神院での法会が効果をこちで盛大な法会を催行した。しかし、たいした成果はなく、異国の神(仏)

である。「剣鉾」というデザインがそれにもっとも適していたのである。 一方、京都というがお市で、経済力を蓄えて成長した都市住民たちは、疫病 三とで光を反射させると同時に、左右対称の形状でなければならなかったの 空を移動させるという方式を取った。そのために「鉾」はより軽く、自分たちの生活圏を隈無く廻らねばならなかった。基本的には人が「鉾」を差して神の生活圏を隈無く廻らねばならなかった。基本的には人が「鉾」を差して神の生活圏を関立という方式を取った。そのために「鉾」はより軽く、自分たちの生活圏を関立という方式を取った。そのために「鉾」はより軽く、追りたちいら疫神を集めるにはならなかった。 とで光を反射させると同時に、左右対称の形状でなければならなかったのである。「剣鉾」というがである。ことで光を反射させると同時に、左右対称の形状でなければならなかったのである。「剣鉾」というがではなどとは考えなかった。

てい故である。 「京都の鉾の出る祭り」の代表は祇園祭であろう。支配者側からも御霊会ない故である。 「京都の鉾の出る祭り」の代表は祇園祭であろう。支配者側からも御霊会ない故である。

神輿渡御に付随して行われる「剣鉾」の巡行という形態を取る。そのうち祀神輿の巡行とは別に行われる祇園祭は別として、鉾の出る祭りの多くは、

る神座という目的で、撓む鉾が差されることが多い。の名称が用いられるところが多いが、その場合の鉾は、氏子圏の疫神を集められる祭神が牛頭天王や素戔嗚尊である神社は、近代以前の社号に「天王」

しに来てもらい、彼らをも接待するのが原則である。といれて、彼らをも接待するのが原則で、毎年決まった専門の鉾を住民の側が鉾仲間や講を組織して調進するのが原則で、頭屋(当番)に当たこの鉾を出すのは、その成立過程でもわかるように、神社の側ではない。

剣鉾が登場し、明和九年(一七七二)の『祭礼神輿渡御略図』(猪名野神社所 祭礼のなかにも多くみられる。とくに兵庫県伊丹市猪名野神社(旧牛頭天王社) やかさに惹かれて、それを風流の趣向として神輿渡御行列に取り込む場合が 剣鉾に代えていく祭礼である。この場合の鉾は、必ずしも撓む必要はない。 の地では、町の豪商などが組織した仲間中が、領主であった近衛家を通じて、 の祭礼には、江戸時代この地の領主であった近衛家から寄進を受けたという 同じような例は、滋賀県の大津市や野洲市をはじめ、丹波・丹後地方の村落 差しの技術を彼らなりに習得して、祭礼に持ち込んだ場合であるが、これと みられることである。その身近な例としては、京都西山の若者たちが、 であったと思われるが、きらびやかな剣鉾の登場に影響されて、その形態を 氏神である牛頭天王社の祭礼に、本格的な京都の剣鉾を導入したのであろう。 形態的には同じようにみえるが、祭神や祭日によって見分けることができる。 を主眼とした鉾もあった。本来は神輿渡御の道を祓うという「幸鉾」的性格 もう一つは、江戸時代前期から近代にかけて、剣鉾の出る京都の祭りの華 一方、疫神を集めるという目的とは別に、氏神祭礼の神輿渡御を彩ること には、その様子が詳しく描かれている(図19)。酒造業などで栄えた伊丹

ある山王祭、浅草神社の三社祭などでも登場している。正保三年(一六四六) 日光東照宮祭をはじめ、 負担で執行されたものであり、都市住民側の鉾ではなかったのである。 多かったようである。もちろんこれらの祭礼の剣鉾は、祭礼を主催する側の いない、形態のみを取り入れた祭礼では、このような方式が取られる場合が れて二人で舁く形態が取られている(「江戸天下祭屛風」)。本格的な剣鉾差しの の剣鉾を差す行列が描かれているが、江戸の山王祭の剣鉾は、四角い枠に入 に描かれた和歌山の「東照宮縁起絵巻」(和歌山市雲蓋院蔵)には、 剣鉾は江戸時代に誕生した城下の新しい祭礼にも、盛んに取り込まれた。 和歌山城下の東照宮祭、さらには江戸の天下祭りで 本格的に七本

(民俗芸能学会代表理事)



[図 19] 『猪名野神社神幸絵巻』巻二より「祭礼神輿渡御略図」 (江戸時代 18世紀) (伊丹市・猪名野畔社蔵)

1

2

3

- 二〇一四年より再び前祭と後祭が分離された。
- 行されても名称は御霊会と呼ばれ続けた。御霊祭ともいう。 御霊会は「会」という以上、本来仏教系の法会であるが、その後に神社系の行事として催
- っていたとは思われない。 朝世紀』天慶元年(九三八)六月二七日条)程度の祭祀はあったとしても、この時代、都の 番被害を被るのは都市住民ではあり、辻々で男女一対の像を祀り、岐神や御霊と称する『本 の御霊会は民間行事を模倣して始まったという説を展開している。確かに洪水などにより一 治安にあたるのは国家の責任であり、都市民には盛大な御霊会を催行するだけの経済力は育 西山克氏は自身が執筆した『年中行事大辞典』(吉川弘文館、二〇〇九年)において、朝廷
- 『豊田武著作集 第一巻 座の研究』(吉川弘文館、一九八二年三月)所収 「祇園の諸座
- 吉川弘文館、二〇一三年一〇月刊

5

4

- 6 大社と熊野速玉大社の象嵌鉾」として、これらの象嵌鉾を紹介している。 西山要一氏が『文化財学論集』(奈良大学、一九九四年八月)所収「二つの象嵌鉄鉾-春日
- 7 8 頭にはすでにあったと思われるが、当初は朝廷から調進され、神輿渡御の後方に供奉してい は神輿渡御とは別の、贅を尽くした風流行列として、市中の要衝を練り歩く行列となってい たようである。 に。それが天治元年(一一二四)には白川法皇の命で先行するようになり、平安時代末期に 祇園会の馬長稚児は、『枕草子』に「心地よげなるもの」として記されるから、十一世紀初
- 思文閣出版、二〇〇六年五月刊
- 『立命館文学』六二三号、二〇一一年七月刊
- (10) ただし『康富記』応永八年六月七日条に「降雨、今日祇園祭礼也、 今日無定桙、只最小桙一有之、」とあるのが気になる。 大政所参詣、
- (1) 室町幕府の『殿中申次記』や『年中定例記』などに折紙を与えることが記される。
- のコースに合致するから、室町時代前期にはほぼ山鉾巡行のコースが定まっていたようであ また同日記の宝徳二年六月十四日条には「風流山笠以下渡三条大路、」とあって、これも後祭 云々、(中略)浄居庵四条高倉桟敷構見物云々、」とあるが、これは現在のコースでもある。 『康富記』応永二十六年六月七日条には「桙山已下風流、四条已下至五条、悉如例年結構
- 13) 前掲註(8)の『中世京都の都市と宗教』
- (14) 北野神社の祭礼に関しては三枝暁子 「北野祭と室町幕府」 (五味文彦他編 『中世の寺院と都 市・権力』山川出版、二〇〇七年)がある。
- 社の御田植祭の植女の例が、嘉禄三年(一二三七)九月六日付の「官宣旨案」(東寺百合文書) かったのかも知れない。 にあり、御輿渡御を先導する鉾の役が、北野社周辺の「保々」に課せられたのは、 神社祭礼の所役が「保」を単位に課せられていた例としては、山城国二ノ宮である松尾大
- (16) 北野天満宮の鉾については、本多健一氏が先述した著作のなかで耕三寺の鉾も含めてすで

て紹介している。

- (1) 初出は辻惟雄先生還暦記念玄編『日本美術史の水脈』(ペリカン社、一九九三年) 所収の「祭
- 9、乱によう置了の行事になっている。 中央渡御の行列であろうか。 中央渡御の行例とは別に、馬長稚児を中心とした風流行列が出ていた可能性も考えられる。 神輿渡御の行例とは別に、馬長稚児を中心とした風流行列が出ていた可能性も考えられる。 18) この絵巻に神輿渡御が描かれず、馬長稚児を描くのは、この時代、祇園御霊会と同様に、
- (19) 現在は青龍町の所有となっている。
- 氏紹介の下御霊祭剣鉾摺物「神幸図」参照) 兵紹介の下御霊祭剣鉾摺物「神幸図」参照) 幸鉾が木枠に立てられて、四人の者が舁く形式は滋賀県大津市の大津祭に残る。(福原敏男
- (21) 幸鉾は現在でも神幸に出されているが、手持ちである。
- 『日本紀略』長保三年五月九日条。
- | 帖』など室町時代末期の絵画にも描かれるが、神輿のみで鉾は出ていない。| 23) 永禄八年に狩野永徳が描いた『洛中洛外図屏風』や山口蓬春記念館蔵の『十二ヵ月風俗図
- 都芸能と民俗の文化史』(思文閣出版、二〇〇九年)に再録。 24) 「貴船のささ神輿考」(『宗教民俗論の展開と課題』法蔵館、二〇〇二年)。その後拙著『京
- (25) 前掲註(17)の泉氏の論文参照。
- 剣鉾まつり』二〇一一年三月)ほか。
- 銘文があることがわかったが、全体的古さが感じられないということである。(28) 今回の調査で、下京区の天道神社の龍鉾の餝受に「寛永六年 天道宮 九月吉日」という
- 共同体成立が、この頃であるというのである。できるのは、一五二〇年代以降、天文年間を待たねばならないとされる。本来的意味での町できるのは、一五二〇年代以降、天文年間を待たねばならないとされる。本来的意味での町(29) 最近の研究によれば、祗園祭の山鉾を、今日的意味で町共同体が管理運営する執行体制が
- (3) 本来六月十五日が祭礼日であるが、この年は八月に延引した。
- (31) 現在のどこの地なのかは不明である。
- 蔵之党如例企印地、招喧嘩」とある。
 「尺素往来」の祗園御霊会の記事には「晩頭白河鉾可入洛之由風聞候、」に続けて、「六地

剣鉾のまつりの行事

長谷川 嘉和

はじめに

祭りを一括して「剣鉾のまつり」と呼ぶことにした ろ普通の体格で重い剣鉾を倒さずに立てて歩くのが見せ場である。 こうした ら鈴を鳴らして行進する。 剣鉾を持つのは必ずしも大男とは限らない。 むし まつり」と称している。神社から神輿の行列を仕立て氏子域を巡り、途中御 旅所にも立ち寄り再び神社へ戻ってくる。その行列に剣鉾が付き従い、きま った場所で担いできた剣鉾をまっすぐに立て、剣先(鉾先)を前後に振りなが 地域社会を基盤として剣鉾を出す祭りがある。本調査ではこれを「剣鉾の

ところが現在では、

剣鉾を出してもこれを神幸列で立てて振らない、

剣鉾



[写真1] 藤森祭の剣鉾(長谷川嘉和, 平成24.5.5)

のまつりとしては変容した祭りが増えている。今回の調査では、これら変化 れることに注目したことが重要である。 した祭りも調査対象に含めている。「剣鉾のまつり」は、祭りに剣鉾が用いら

が出る所では剣鉾を差す若い衆の組織などが加わる。 祭りを維持する組織として、宮座や頭屋制などが絡み、 全般的に祭り行事としてはさほど複雑な内容を持つものではない。これに 氏子の中から鉾差し

剣鉾のまつりの行事について

祭りの準備

1

事と本祭行事とがあるものであろうが、祭りによっては宵宮行事を省略して れ、その間神輿は御旅所に留まる場合もある。 た、紫野今宮神社や北野天満宮のように祭日が神幸祭と還幸祭の両日に分か いる所がある。前日に宵宮行事を行う場合は宵宮の日に準備作業をする。 剣鉾のまつりは、準備と祭り当日とから成り立っている。本来は、 宵宮行

その中央奥に神号を書いた掛け軸を掛け、その前または脇に組み立てたまま 神饌の準備などがある。剣鉾は、祇園祭の山鉾のように常は解体して収納さ 前日とで行われている。準備には、剣鉾の組み立て、剣鉾を祀る祭壇の設営、 のごとく剣鉾を中央に立て、それに神饌などを供えてある。巡幸に加わる剣 でまだ棹(「長柄」ともいう)を付けない剣鉾を立てる。 を借りて祭壇が組まれる。この場所を「鉾宿」「当屋」と称することもある。 域差もみられる(1)。剣鉾などは、 れており、部品を取り出して組み立てなければならず、組み方には微妙な地 現在では、剣鉾のまつりの大半が祭り当日とその準備をする宵宮を含めた 個人の家または町会所や公民館などの一角 鞍馬では剣鉾を祀るか



(長谷川嘉和, 平成 25.5.18)

(長谷川嘉和, 平成25.10.22)

[写真3] 葉付き大根とはじかみ生姜(鞍馬火祭)

姜二本を供えていた。

祭りが終わると鏡餅

準備ではないが、氏子が剣鉾を今も差す

切る手間を省くため近年は最初か

[写真4] 当屋城え(御霊祭・武者小路町) (長谷川嘉和,平成25.5.17) ている。 ところでは、祭りの前に何回か剣鉾を差す ら戸数分の小餅にして供えるところもある。 は切り分けて、お下がりとしていただく(配 稽古を行い、新たな後継者の養成にも努め

2

宵宮の行事

と称することが少なくなく、 拝を受ける。まさに宵宮から祭りが始まる。 社では「お参り」と称する。夜になると、提灯などを吊して明るくし夜の参 化している。神職が鉾宿を巡って祓えをするのを建仁寺の鎮守京都ゑびす神 を始め、そのあと神職が順に当屋を訪れてお祓いなど神事を行う形式は一般 備を始める場合が少なくない。宵宮の日は朝から当番が祭壇の設営ほか準備 だけで行事のないところもある。宵宮行事をする場合は、この日に祭りの進 何らかの行事を行うものであるが、 祭りの前夜は宵宮である。 ヨミヤ(夜宮 前日は準備

当番を務め、 お祓いをする。 を入れると町内の人もお参りし、 必ずしも宵宮とは呼ばないが、朝から当屋飾りをし、夕刻には提灯などに火 上京区武者小路町は御霊神社の氏子であるが、六組に分かれていて輪番で 町内の二軒の家を隔年に借りて当屋にしている。祭りの前日を 午後七時頃には神社から神職が来て当屋の

鰹節、

なす、きゅうり、薩摩芋、

筍、

メロンなどの果物、

神酒、

洗米、塩、水などで特記するほどのものはない。

蕗などの野菜、りんご、夏みかん、バナナ、

海・山・野で収穫されたものが供えられている。列記すると、昆布、スルメ、 白い鏡餅一重ねのほかは、必ずしも決まった品があるわけではないようで、

ひじき、のり、高野豆腐、椎茸などの乾物、鯛などの魚、大根、

人参、

嵯峨祭では葉付き大根を供えるとするのが少なくないが、近年販売されてい

る大根は葉を切り落としたものが多く、葉付き大根の入手に苦労している。

鞍馬火祭(由岐神社例祭)の鉾宿では共通して葉付き大根と葉付きのはじかみ生

現在の宵宮の行事としては、 剣鉾や吹散を飾った当屋へ神社から祓えに参 鉾のほかにも剣鉾を所有していることがあり、留守鉾などと称して脇に立て

る。また、剣鉾に付ける幡である「吹散」も保有する数だけ周囲に飾られ、

祇園祭の会所飾りに似るものがある。すでに鉾を差さず荷車や台車などに立

てて巡行する町では、それを組み立て周囲を幕で飾る作業もある。

当屋では神饌が供えられ、氏子からの献饌もある。神饌には、紅白または

る程度の簡素なものが多い。

3 祭りの当日

祭りが一日で終わる場合、剣鉾は当屋から神社へ持って行き、神社で祭典祭りが一日で終わる場合、剣鉾は当屋から神社へ持って行き、神社で祭典のが一般的な剣鉾のまつりである。

たことすら町内の記憶から失われる。のになっても剣鉾を収蔵したまま出さなくなる。年数を経ると、剣鉾があっておくだけとなる。これを「居祭り」と称している。そうして、やがては祭列に加わるようになり、さらに衰退すると、終日神社境内などに剣鉾を立てがけ、曳いて行鉾を差さなくなると、台車などを仕立てそれに剣鉾を立てかけ、曳いて行

馬)、氏子総代 (乗馬)、宮本の稚児 は下在地町の御幣と剣鉾、 祭りを参照されたいが、これがどこまで旧習を守っているか確認するには、 カ、ト四頁)とあり、これを現行の行列と比較してみるとかなりの変化が伺われ 雲寺の法師一老二老 (乗馬)、稚児 (乗馬)、座衆、最後は花笠であった。」 (音 比較できる古い資料が乏しい。 たとえば昭和初期の渡御の様子を井上頼寿は 『京都古習志』で以下のように記している。岩倉の石座神社で還御の「行列 現行の剣鉾のまつりにおける行列の列順については、民俗調査編の個々の 現行では、 忠在地、 社旗、金棒引き、御幣、各町の一番和尚、各町の剣鉾 上蔵の順)、 他町の剣鉾、扇持、畳紙持、稚児、神輿、神殿(乗 稚児、 (乗馬)、神輿、 踊り子、 子ども神輿、 御旅の神主 (乗馬)、大 太刀持ち、大人

どの変化が個々の剣鉾のまつりにあると推測される。
しており、扇持ちなど行列から消えている役もあり、かなりの様変わりが見しており、扇持ちなど行列から消えている役もあり、かなりの様変わりが見種児、神輿など基本は変わらないものの、神殿や氏子総代、稚児などは乗馬神輿、神主、白丁、奉賛会長、と報告されており、傍線を引いた御幣、剣鉾、

数日にわたり行事を行う祭りがあった。ところで、今回調査対象とした剣鉾のまつりのなかには、一日で終わらず、

う鎮座伝承から「おいで祭」とも呼ばれているが、民俗的な瑞饉神輿は御旅四日還幸祭となる。四日は菅公の御霊が始めて北野の地へおいでになるとい野、五月一日に御出祭、午後神職が各町をお祓いして回り、三日に神輿御霊め、五月一日に御出祭、午後神職が各町をお祓いして回り、三日に神輿御霊め、五月一日に御出祭、午後神職が各町をお祓いして回り、三日に神輿御霊ととえば、伏見の藤森神社では、四月二十九日に神輿を出すなど準備を始

ある。

へ帰る還幸祭のそれとを二日に分けて行う祭りが [表1] のとおりいくつかへ帰る還幸祭のそれとを二日に分けて行う祭りが [表1] のとおりいくつかそのなかで、剣鉾を含む祭りの行列が御旅所へ向かう神幸祭の渡御と本社

所から氏子域を巡るものの北野天満宮へは寄らない。

離宮を経て神社まで巡幸し、本祭にも神輿は二か所の御旅所を巡る。ここでままで行列には加わらないが、宵宮祭の夜に神輿が修学院御旅所から修学院れ二度の巡幸に従っていた。修学院鷺森神社の剣鉾は今では御旅所に立てたに加わる。巡幸のコースは異なるが、もとは十二町から一基ずつ剣鉾が出さ紫野今宮神社では、神幸祭とその約十日後の還幸祭に剣鉾を組み立て巡幸紫野今宮神社では、神幸祭とその約十日後の還幸祭に剣鉾を組み立て巡幸



25.5.5)



[写真6] 御霊祭の鷹羽鉾(長谷川嘉和,平成25.5.18)

[表1]氏子域の巡行を二日間にわたり行う祭り

還幸祭 十月二十三日	神幸祭 十月二十二日	由岐神社	鞍馬	例祭
還幸祭 神幸祭の一週間後	炬火祭(神幸祭)	三栖神社	横大路	三栖祭
還幸祭 十月第二日曜日	神幸祭 十月第三土曜日	八幡神社	京北	秋季大祭
神幸祭 十月体育の日	夜渡り神事 神幸祭前夜	栗田神社	粟田口	粟田祭
還幸祭 十月第二日曜日	神幸祭 十月第二土曜日	山国神社	京北	山国祭
還幸祭 十月第二日曜日	神幸祭 還幸祭の三日前	北白川天神宮	北百川	秋季大祭
還幸祭 十月第二日曜日	神幸祭 例祭の前日	春日神社	西院	春日祭
還幸祭 十月四日	神幸祭 十月一日	北野天満宮	北野	瑞饋祭
神幸祭 五月五日	宵宮祭 五月四日	八大神社	一乗寺	上一乗寺氏子祭
神幸祭 五月五日	宵宮祭 五月四日	鷺森神社	修学院	例大祭
還幸祭 五月十五日	神幸祭 五月五日	今宮神社	紫野	今宮祭
	四田	神社名	所在地	名称

宮の夜に剣鉾は出ないが神輿が氏子域を巡行し、本日には剣鉾保存会の鉾差 しが加わる。

は還幸祭とはいわず神幸祭と称している。八大神社上一乗寺氏子祭では、

日に行っているといえよう。 朝神事に、もう一本は昼神事に用いる。これなどは明らかに二つの神事を同 日ほど御旅所に据え置き、同日午後には昼神事を始め神輿は御旅所から神社 事を始める。そうして早朝に御旅所へ渡り朝神事を行う。そのあと神輿を半 ものであろうか。岩倉の石座神社では、深夜から鉾を組み立て、未明から神 剣鉾のまつりには二日に分けて行列が渡御するものがあるのは何に起因する 宮と本祭から成り立ちその翌日は後宴祭で終わるにもかかわらず、祇園祭や 気づくのは、八坂神社の祇園祭との共通性についてである。祇園祭でも前祭 復に基づく呼称と推察されるが、後の祭りを神幸祭と呼ぶ例もある。ここで れる。二度の巡幸を初日は神幸祭、二日目を還幸祭とするのは御旅所への往 幸に加わっていないが、聞き取りからはかつて剣鉾も参加していたことが知 (戻される。氏子五町はそれぞれ剣鉾を二本ずつ保有し、そのうちの一本は (神幸祭)と後祭(還幸祭)に分かれて二度の巡幸が行われる。大半の祭りは宵 以上のように神幸行列が二日にわたり行われ、現状では剣鉾は必ずしも巡

祭では神幸祭と還幸祭の巡行路が異なるという。祇園祭の前祭と後祭に類似 とから、 ように十日間も神輿が御旅所へ留まる場合もある。このうち剣鉾が出るのは、 するものである。 今宮祭や瑞饋祭では両日ともであるが、嵯峨祭や春日祭、 だけ出る。嵯峨祭や春日祭、三栖祭では還幸祭の前日に宵宮祭が行われるこ 神幸祭と還幸祭の間隔は祭りにより様々で、翌日のこともあれば今宮祭の 神幸祭よりも還幸祭が主たる祭りと位置づけている。今宮祭や瑞饋 山国祭では還幸祭

になっていたのではなかろうか。 このほか現行では一日で済ませている祭りのなかにもあえて神幸祭と還幸祭という二つの祭りを御旅所祭祀を挟んで行うのを基本とすは神幸祭と還幸祭という二つの祭りを御旅所祭祀を挟んで行うのを基本とすは神幸祭と還幸祭という二つの祭りを御旅所祭祀を挟んで行うのを基本とする祭りではなかったか。そして、かつては日を空けて二つの祭りを催す八幡宮社、銀祭と呼び分けて祭りを行っている場合(清閑寺の山王神社、岩倉の幡枝八幡宮社、銀祭のではなかったか。そして、かつては日を空けて二つの祭りを催すことる祭りではなかったか。そして、かつては日を空けて二つの祭りを催すことる祭りではなかったか。そして、かつては日を空けて二つの祭りを催すことる祭りではなかったか。そして、かつては日を空けて二つの祭りを催すことになっていたのではなかろうか。

でもよいとされる。

「でもよいとされる。

「ないとされる。

「ないとされる。

「ないとされる。

「は、翌日が仕事で後片付けに携われないため、その日のうちにすべいでを終えて神社へ戻ってきたらすぐに剣鉾を解体するかというと、氏子域の巡行を終えて神社へ戻ってきたらすぐに剣鉾を解体するかというと、氏子域の巡行を終えて神社へ戻ってきたらすぐに剣鉾を解体するかというと、氏子域の巡行を終えて神社へ戻ってきたらすぐに剣鉾を解体するかというと、のとすぐに山鉾や博多祇園山笠など祇園信仰に基づく祭りでは、巡行を終えでもよいとされる。

にも御霊神や天神である。すなわち都市における疫神送りの祭りで剣鉾はそ剣鉾のまつりは、スサノオを祭神とする祭りが少なくない。スサノオ以外

てと解体は鉾差しの管轄とみなされたことによるものであろうか。ているとすれば、鉾差しの妙技を見ることに人々の関心が移り、鉾の組み立の依り代と考えられるが、疫神を送り終えたあとの剣鉾の始末に意識が薄れ

剣鉾のまつりを支える組織

西院春日祭の剣鉾は、「鉾仲間」もしくは「剣鉾仲間」という人々によって 西院春日祭の剣鉾は、「鉾仲間」もしくは「剣鉾仲間」という人々によって 変いまた転出などにより鉾仲間を抜ける家もあり、鉾仲間の家数は減 を和を嫌いまた転出などにより鉾仲間を抜ける家もあり、鉾仲間の家数は減 を和を嫌いまた転出などにより鉾仲間を抜ける家もあり、鉾仲間で護持してい をで風呂を沸かし、現在は神社社務所で行っている酒食の接待もあった。 さいる。 これぞれの鉾仲間を構成する家が順に当屋を務め、祭りでは鉾差しを依 な装のクリーニング代、剣鉾の修理費などすべて鉾仲間の鉾仲間で護持してい をで風呂を沸かし、現在は神社社務所で行っている酒食の接待もあった。 とれを嫌いまた転出などにより鉾仲間を抜ける家もあり、鉾仲間の家数は減 という人々によって

し、祭りの間は当屋で剣鉾を飾る。ノ鉾仲間」「参ノ鉾仲間」に分かれ、毎年交代で一基ずつ剣鉾を神輿行列に出成され、新規に加入することも離脱することも出来ない。「壱ノ鉾仲間」「弐にれに対し北白川天神宮の鉾仲間は、旧白川村住民の系譜を引く家々で構

吉日(仲間中」とあり、昭和十年代戦争が激しくなるまで鉾仲間と当屋制度祭りが行われ、吉田神社の唐胡麻鉾錺箱の蓋裏墨書銘には「大正十四年五月番ニ之ヲ勤メリ」(愛宕郡各町村沿革調)と、明治時代は鉾仲間による当屋制度で左京区吉田の木瓜社でも「各五六戸ニテ鉾仲間ヲ結ヒ、毎祭当屋ヲ設ケ輪

するとともに、地元の有志が鉾差しを務めている。が残っていたという。現在は吉田剣鉾保存会を結成し、剣鉾を一括して管理

北白川天神宮などでかろうじて見られるだけとなっている。な中間の組織はいずれの地でも衰退し、現在では上記の西院春日神社やり十一月」などとみえ、かつては鉾仲間によって支えられていたことが知れり十一月」などとみえ、かつては鉾仲間(氏名省略、筆者)干時天保十四年癸年京区聖護院の須賀神社春季大祭では、三軒の八ツ橋屋が毎年鉾宿を務め

である。
である。
このように講組織で剣鉾の祭りを続けているのは僅かかれて管理している。このように講組織で剣鉾の祭りを続けているのは僅か八神社では鉾講が組織され、三組の鉾を一之鉾講、二之鉾講、三之鉾講に分 北野天満宮の瑞饋祭に用いられる梅鉾は二十四日講が護持し、銀閣寺町の

集した講ではないと思われるが、かつては各地で講組織により剣鉾のまつり 講中」が見られるものの、 が維持されていた。いつごろ講組織が解消したのかはまちまちであろうが、 りを維持したところがある。必ずしもすべての講が剣鉾のまつりのために結 鷹羽鉾は 具を収納する明治三十三年に新調した箱に「五軒町矢鉾講中」と墨書があり、 町中」に変わっているという。(民俗調査編 上御霊神社の紅葉鉾に関する史料では、 たのを菅大臣神社が買い戻したという剣鉾に「寛政五壬丑年/白梅講/八月 吉祥日」(錺受の裏) とある。 このほか五条天神社の「八日講中」、三栖神社の 「山王講中」、福王子神社の「山越村明神講」など講中を組織して剣鉾のまつ 過去に講組織があったのを銘文などから拾うと、粟田祭で弓矢鉾の附属金 「明和五年戊子九月吉日/鷹之羽講中」と朱書が見られる。 一八世紀末の寛政七年(一七九五)には 明和元年(一七六四)まで「西洞院 「徳大寺 流出し

現在もっとも多いのは町を単位として剣鉾を出す祭りである。自治会より

ら真如堂前町・表町・扇町の三町に変更されており、上木下町の鷹羽鉾はそ 否かを決定する。 内会費を納める六軒だけで自治会を結成し祭りに当たっている。なお、 する町の変遷はあっても、いずれも町内会もしくは町内の有志で護持してい の先頭を行く一番の太刀鉾は御霊前之町から青龍町へ、柏鉾は中樹之下町か 町、上樹之下町(上木下町)などは現在に至るまで町名に変更はないが、行列 荷車は学生アルバイトが押す。また、紅葉鉾(徳大寺殿町)は祭りに出る人が 町(枝菊鉾)では、町内会長を中心に協議してその年の祭礼行列に参加するか 番で当番を務め、今出川町は町内に約二十五軒あるもののテナントなどで町 る。さらに町内のありようを見ると、たとえば武者小路町は六組に分かれ輪 の銘文からかつては不動前町で保持していたことが知れる。このように保有 の鉾名と町名が列挙されている。そのなかで、今出川町、 蓋裏にある貼紙「御鋒順番次□(第カ)」によれば、一番から一七番まで一七 も小さい十数軒から二、三十軒の町内会が単位となり、一本の剣鉾を出す。 人になって、平成二十三年、二十四年とも巡行に参加していない。(民俗調 たとえば御霊神社の紅葉鉾に「享和二壬戌歳正月新調」と墨書した長持の 当日は都合の付く者数名が行列のお供をし、剣鉾を載せた 武者小路町、

「剣鉾」の呼称と部品名、 祭りの民具

鉾」という文字が散見される。 の用語が用いられていたことがわかる。このほか、菅大臣神社堀の内町明治 箱書編」による)。 このことからすでに江戸時代後期には一部において「剣鉾」 十二年の剣箱墨書、御霊神社浪太刀鉾大正十四年の見送り箱墨書などで「剣 姫宮龍菊御剣鉾」「天保四年巳五月吉祥日新調」の墨書がみられる(以下「銘文 八丙四月廿七日」と墨書があり、市比売神社の龍菊鉾の剣箱蓋表裏には 「剣鉾」の名称は、 新日吉神宮の四番鉾の錺受箱蓋に 「剣鉾御□□」 「寛政 市

られるが、そのひとつに鉾先を「剣」と呼ぶことである。御霊神社寶鉾の剣 この種の鉾がなぜ「剣鉾」と呼ばれるようになったのか。 種々の説が考え

乙卯年六月吉日」と墨書があ 箱蓋の表裏に「御剣」「享保廿



宮町」とある。

いずれも鉾の

納する箱の蓋表には金字で があり、同神社蓮鉾の剣を収 五月吉日」「柏鉾御剣」の線刻 茎の表裏に「宝暦十二壬午年 七月新調/上御霊中町」とあ 裏に「御剣」「明和二乙酉年秋 「御剣函」、 「明和二乙酉五月吉祥日芝大 今宮神社の柏鉾には剣の 同神社菊鉾の剣箱蓋の表 蓋裏には白字で

先に付いているのは剣であると理解している。つまり剣鉾は剣の付いた鉾と

る。したがって剣鉾や錺を収納する箱の蓋表の銘文が、「御鉾、新先斗町」(能 こととも関係しようが、地元ではあくまでも「鉾」と捉えていることがわか くつもの剣鉾が出ることから、個々の鉾を区別して呼び分ける必要があった いる。たとえば錺が菊をあしらったものであれば「菊鉾」、 「扇鉾」などと呼ばれ、必ずしも剣鉾とはいわない。それは一つの祭りにい 個々の剣鉾の呼称について、一般的には錺の形から区別して名付けられて 「葵御鉾一飾」(須賀神社)となる。 扇の図柄であれば

特別に扱われる。それは氏子から出す唯一の祭具ということもあろうが、 のモノ、一種の信仰対象に近い受け取り方がなされている。 箱の蓋に「御剣」と墨書されるように、単なる祭祀用具ではなく、それ以上 て神幸列に加わるものである。行列のなかで剣鉾だけが鉾宿や当屋を設けて 剣鉾のまつりは、神輿が氏子域を行列して巡行するなかに剣鉾も鉾を振っ

を果たしている。 共同体に蔓延する疫神がそれに反応して剣先に依りつく、依り代としての役 ことから剣先をマネキとも呼び、 振られて剣先がゆらゆらと前後に揺れそれが手招きしているようにも見える 鉾宿に神号を書いた掛け軸が祀られその脇に剣先が添えられるのも、 ゆれることで剣先がきらきらと光り輝く。

吹散に付ける房や房掛け金具などを有することもある。それらは山鉾屋台の 棹袋など部品ごとに別々に収納される。数か所に分散して収蔵することもあ ように、常は解体して、剣箱、 棹(長柄)、吹散(見送)、ザブトン(マクラ)などで構成されている。その他、 剣鉾は、一般的に剣 (剣先)、剣挟、錺、錺受(額)、受金 錺箱、 錺受箱、 吹散箱(見送箱)、 (州浜)、鈴、 棹箱または

受金でなく左右の錺を受ける錺受と解釈し、「亀」が受金である可能性が高い。 指すのか未詳ながら、州浜が八百四十匁もあることから、ここでいう州浜は 担い枠を漆塗りし、それを収納する箱を作っている。さらに枠の周囲を飾る が取れるようにしつらえてある。部品のなかで「亀二ツ 百五拾目」が何を ぼ左右が同等となるようにし、合わせると左右それぞれが九百四十匁で均衡 も一から四まで一つ一つ呼び分けられ、重さには多少のずれがあるもののほ 量の半分以上を占める。また、錺の花葉は、右ノ一、右ノ二から四まで、左 階から重量を計算して製作したものと推測される。 総重量七貫五百九十八匁 れば、年ごとの当屋が責任を持って一年間預かるなど管理方法は様々にある。 からなり、個々の重さが表示してあるところからすれば、それぞれを作る段 水引や胴幕も必要になる。 した剣鉾の部品は、「御剣、御剣挟、州浜、亀二ツ、錺花葉、長柄、鈴、 (約二十八・五キログラム) から長柄の三貫五百匁を差し引くと金具だけでも全重 剣鉾の棹を短くし、担い枠などに立てて巡行するように変更した町では、 今宮神社蓮鉾の天明三年癸卯五月十六日改め「新調御鉾」によれば、新調 縄

べる台などが必要である。
このほか剣鉾のまつりには、御神号軸、当屋飾りに必要な屏風や神饌を並ころでは三〜四着の半纏や浴衣と帯を揃え、鉾を受ける差革も備えている。 り鉾のまつりには、鉾差しの衣装を揃えている。 とりわけ鉾差しを雇うと

四 さんやれ ―剣鉾の芸能―

神菅原道真をはじめ政変などにより不遇の死をとげた皇族貴族の御霊である剣鉾のまつりをする神社の祭神は、素戔嗚尊すなわち牛頭天王、または天

行われている。行させる、その疫神を鎮め共同体の外へ送り出す祭りとして剣鉾のまつりは場合が少なくない。御霊神社に代表されるように怨霊が疫神となり病気を流

を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味については、「さんやれといふは、ちあやれといふ言の転じたる成べし」(『諸国図会年中行事大成』三月五日条七里祭さあやれといふ言の転じたる成べし」(『諸国図会年中行事大成』三月五日条七里祭さあやれといふ言の転じたる成べし」(『諸国図会年中行事大成』三月五日条七里祭とか、「剣(地元ではマネキと呼ばれる)で神を招き、御阿礼(地元では顕現の字を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をして病魔を解き放ってもらう意味があると伝えられている。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。」(本を当てる)をいる。

返しつつ行列が進む。

『宮係が別の一節を歌うと子どもたちが再び声を揃えて囃す、これを繰りた、サンヨーレの子どもたちが声を揃えて「さーんよーれさんやーれ」と囃と、サンヨーレの子どもたちが声を揃えて「さーんよーれさんやーれ」と囃と、サンヨーレの子どもたちが声を揃えて「さーんよーれさんやーれ」と囃と、サンヨーレの子どもたちが声を揃えて「さーんよーれさんやーれ」と囃と、サンヨーレを小学三年生の男児が務める役になって驚森神社神幸祭では、サンヨーレを小学三年生の男児が務める役になって

拝し (中略)、赤山から囃し出して「サンヤレサンヤレ」と云ひ乍ら太鼓を叩『京都古習志』には、「修学院の神庫で列を組み、行列だけが赤山明神に参

味の解釈はしないことにする。上賀茂太田神社のサンヤレや滋賀県でも大津

市真野のサンヤレ、草津市や守山市の春祭りでサンヤレを唱える囃子物の芸

能が伝承されていることを指摘するにとどめておく。

報告書民俗調査編、吉田神社末社今宮社)など様々な解釈がみられるが、ここでは意

より修学院御旅所へ戻るときから囃していたことがわかる。 とあり、昭和初期とほぼ同様のことが現在も続けられ、赤山明神(赤山禅院 を出るまでは鳴り物を控えるという伝承も残されている。 行列の中に「サンヤレ」とて小学三四年生の組があって囃すのである」 赤山明神では門

ど踊ることはない。男児には身体が隠れてしまいそうなサンヨウレ箒を持っ 冊で作った「サンヨウレ箒」を持った踊子たちと、下座の奉幣太鼓担当者は、 て踊ることが困難かも知れないが、踊子と呼ぶからには古くは何らかの踊り 太鼓一打と摺鉦五個である。 サンヨウレ箒を持つ男児を踊子と呼ぶがほとん し立てながら行進する。」(民俗調査編、八大神社上一乗寺氏子祭)。 楽器は鋲打ちの 「あーれはなんじゃ、おーどーりーじゃ、さーんよーれ、さんよーれ」と囃 乗寺八大神社の上一乗寺氏子祭では、神社を出た渡御の列で、五色の短



ばらして関係者に配り、玄 国図会年中行事大成)と称した は、 関に飾った。疫神の依り代 ようで、先に白幣が付いた 紙を付けたサンヤレ竹を持 い護符に変わるのである。 は邪悪なものを侵入させな 疫神の依り代である。サン サンヨウレ箒は「踊鉾」(諸 ヨウレ箒は祭りが終わると 滋賀県高島市の川上祭で 小学生男児が竹枝に色

> わないが関連性を想起させる祭りである。 ち、大勢が輪になってサンヤレ竹を振り互いの色紙を落とし合う。箒とはい

る。(民俗調査編、吉田神社末社今宮社神幸祭)。 先達がサイアレ提灯をかざし、「さいあれ、さいあれ、さいあれ」と三度唱え 吉田神社末社今宮社の神幸祭では、唐胡麻鉾を差して拝殿を周回するとき

いざんじゃ、さんやーれさんやれ、ゆおうれさんこう、さんやれー」と囃す でとおどれ、さんやーれ、さんやれ、いちのほこは、なぎなた、かぶとがか (民俗調査編、北白川天神宮秋季大祭)。 北白川天神宮の秋季大祭では、三献の儀において老分たちが扇子を手に「め

くないが、疫神送りの祭りとして視野に入れておく必要があろう。 以上の事例からして、剣鉾のまつりでサンヤレが行われるのは必ずしも多

をしたと思われる。また、

うに、鉾差しが片足を上げて左右に身体の向きを変え、また跳び上がりなが でも文化財としては民俗芸能ではなく風俗慣習等として登録している。 差す仕草に芸能性は薄い、または芸能と捉えていないのが一般的で、京都市 ら前進するさまは踊りのようにも見える。しかし、それ以外の祭りで剣鉾を の芸能であると捉えることは出来なくはない。とりわけ嵯峨祭に見られる上 剣鉾のまつりについて、芸能面から見てみると、鉾を差すこと自体が一

と獅子とは関係がないと思われるが、 ない。ただ、獅子舞がよく行う獅子頭に頭を噛んでもらう俗信が生きている。 れておく。中に二人が入る獅子舞の形態をとる獅子の場合はたいてい二頭が 以上ある。祭りの変遷の過程で獅子が付け加わることになったもので、 さんやれではないが、剣鉾のまつりの行列に獅子が加わるところが十か所 本来は獅子舞を舞ったものと思われるが、現在は獅子舞を舞うことは 獅子が加わる行列が少なくないので触





[写真10] 獅子頭 ご噛んでもらう (嵯峨祭) (長谷川嘉和 平成25.5.26)

京都市登録無形民俗文化財

Ŧî.

けてきた。同条例第四十一条によると、「指定された文化財以外の文化財につ 四十件、民俗芸能が十二件である。 いて登録し、その保存及び活用が適切に行われる」ように必要な措置を講ず るというもので、指定から外れたものが登録されている。平成二十六年三月 (昭和五十六年十月二十九日、条例第二十号)が制定されて以後、指定と登録を続 **泉都市の文化財保護は、** 五十二件の京都市登録無形民俗文化財がある。内訳は、 昭和五十六年(一九八一)に京都市文化財保護条 風俗慣習等が

四章の鉾差しの芸態 た祭りのうちいくつかがすでに無形民俗文化財に風俗慣習等として登録され 京都市登録無形民俗文化財に登録されている剣鉾のまつりについては、 (福持昌之) でも触れられているが、 今回調査対象となっ 第

いう観点から文化財に登録されている。一方、「岩倉火祭」や「鞍馬火祭」、 「嵯峨祭の剣鉾差し」、「梅ヶ畑平岡八幡宮の剣鉾差し」は、

ている。この中で「一乗寺八大神社の剣鉾差し」、「西院春日神社の剣鉾差し」、

剣鉾のまつりと

のが別にあるため、それらに着目して文化財に登録されている。 |西ノ京瑞饋神輿| などでも剣鉾は用いられるが、それ以上に注目されるも 剣鉾のまつりの広がりと実態

る亀岡市や滋賀県への広がりが見られた。 か所、秋季(元月~十一月)に三十一か所あることが分かり、地理的には隣接す 剣鉾のまつりの時期を調べると、 京都市内には春季 (四月~五月) に二十一

鉾のまつりを確認できなかった。 鉾のまつりが見られる。そして今回の調査では、 は八坂神社の氏子圏が広がる。その間にわずかに北野天満宮ほかの神社で剣 中京区へかけては一部東山区を含み下御霊神社、中京区から下京区へかけて 在の上京区、中京区、下京区に含まれるが、上京区は御霊神社、上京区から ての南北の地域、さらに南下して伏見区へ連なることがわかる。洛中は、 なる。剣鉾のまつりの濃密な伝承地が市の東側、比叡山西麓から東山へかけ うになる。

左京区が突出して全体の約三分の一近くを占め、

ついで右京区が 合併した旧京北町の三件を加えているとはいえそれに続き、三位が東山区と 市内における剣鉾のまつりの分布を行政区で区切って見ると、[表2]のよ 南区、 山科区、 西京区で剣 現

神社を除いてほかはすべて五月に行われているのに対し、 季よりも秋季に多く催されている。 祭りの時期は現状では、数字で見る限り春季二に対し秋季三の割合で、 また、春季が左京区聖護院山王町の熊野 秋季は三十一のう 春

つりは少なくない。

いり、栗田神社は九月十五日であったのが、現在では上御霊神社では江戸時代に八年は体育の日。にずれたのに比べ、上御霊神社や下御霊神社は五月十八日、下月十八日の秋季の祭りであったのが、現在では上御霊神社では江戸時代に八月十五日の秋季の祭りであったのが、現在では上御霊神社では江戸時代に八方のた太秦広隆寺の鎮守木島明神は、十月十二日付近の日曜日に移動しておあった太秦広隆寺の鎮守木島明神は、十月十二日付近の日曜日に移動しておあった太秦広隆寺の鎮守木島明神は、十月十二日付近の日曜日に移動しており、栗田神社は九月十五日であったのが新暦になって月遅れの十月十五日(現り、栗田神社は九月十五日であったのが新暦になって月遅れの十月十五日(現り、栗田神社は九月十五日であったのが新暦になって月遅れの十月十五日(現

りし、それも適わなくなると境内に立てるに至るなど、剣鉾に執着している。を祭りの巡行に加えようと、枠に取り付けて担いだり補助輪を付けて曳いたある。現在も祭りで鉾を差すのは二十か所ほどで、それ以外は祭りの見せ場ある。現在も祭りで鉾を差すのは二十か所ほどで、それ以外は祭りの見せ場めがまつりは京都市内だけでも五十三か所あることが判明した。しかし、

[表2] 剣鉾まつりの区別分布

右京区	左京区	東山区	下京区	中京区	上京区	区名
2	8	4	2	3	1	春季
10	9	3	3	0	2	秋季
12	17	7	15	3	3	計
計	西京区	山科区	伏見区	南区	北区	区名
22	0	0	1	0	1	春季
31	0	0	3	0	1	秋季
53	0	0	4	0	2	計

(注) 右京区には平成一七年京都市に合併された旧京北町3件を含む。

抜けるようにいつとはなしに減少していると見られる。を持った若年層が育たない近年、町内は弱体化する傾向にあり、老人の歯がとを継ぐ人がいない町では剣鉾を出さなくなる。祭りを支えようという意志行に加わる鉾の数が減少している。町内で祭りに熱心な人が引退し、そのあ上御霊神社の祭りでは、今回の調査より十年ほど前に見たときと比べて巡

(同志社大学非常勤講師

ŧ

はほぼ共通するものの地域差が見られる。り、過剰と思われるほどに縄(または紐)を錺に掛けるなど工夫がなされている。その手法いように固定する必要がある。このため、剣先を剣挟(けんばさみ)という薄い板で挟んだい 剣鉾の組み方は、剣鉾を立てて歩いたとき、剣先が緩むとかその他の部品が外れたりしな

代表例として一乗寺、地元の氏子が差している平野、嵯峨、鞍馬である。分かるが、さらにこれを記述することで組み方の相違をより明確にする。四地区は、東山の本調査では四地区の剣鉾の組み方について映像を作成したので、これを見ればその違いは

ことをいう。鈴吊りの環の下で棹に何重にも巻いて絞めたあと、錺に掛けた縄に縄を巻いて個所個所でコロシながら左右対称に錺の上から下へ縄を掛ける。コロスとは縄がゆるまないい麻縄の中程で輪にしたのを剣先に通し、剣先と竹とを縛る。⑤縛った縄の先を錺に通し、い麻縄の中程で輪にしたのを剣先に通し、剣先と竹とを縛る。⑤縛った縄の先を錺に通し、し込む。剣先の下部分は二枚の竹に挟まれ安定した形になる。③錺を額の左右に差す。④赤たあと、①加工した竹二枚を額、受け金に通し棹の頭に差す。このときマクラという緩衝材東山(一乗寺) 収納庫から剣鉾の組立に必要な錺などを取り出し、組み立てる形に配置し東山(一乗寺) 収納庫から剣鉾の組立に必要な錺などを取り出し、組み立てる形に配置し

める。 おいの金具に戻して麻縄の上から巻き、さらに棹に巻いた麻縄の上からも巻いて止結ぶことにある。⑦別の細紐を棹に巻き、⑥の結び目を強く絞める。その紐を錺の一か所に縛り付ける。鈴吊りの重要なところは、鈴が一方に偏ることなく左右対称に振れるよう縄をにも巻き最後に結び固定する。⑥鈴を吊る。鈴の振りの長さを勘案しながら鈴の麻縄を棹に再度錺に通し、これを繰り返して下から上へ縄を掛け、最初の剣先に達する。剣先でも何重

付ける。

③剣鉾を屋外に立てかけ、吹散を付ける。

⑧吹散の上部に横木を通し房を左右から通し、錺に掛けた縄に掛けたあと棹に巻いて縛る。

⑧吹散の上部に横木を通し房を上部で錺にかけた麻縄を巻き付けて縛る。この縄のかけ方をフンドシガケという。

⑦鈴を振縄二本を通して縛り、左右対称となるように掛けていく。

⑤剣先に棹の上部を差し、棹の最通して強く縛る。

③額と受金を差す。

④額に錺を左右から差す。

⑤左右の錺三か所に②の麻桶ヶ畑

①剣鉾を屋外に立てかけ、吹散を付ける。

安島 Circle Curr Color Carlot Carlot

韓馬(右記三か所と同じ一本鉾)
 ①悼の上部に剣先を挟む木が差してあり、これに受金、
 韓馬(右記三か所と同じ一本鉾)
 ①単の上部に剣先を挟む木が差してあり、これに受金、

差ないが詳細に見るといくつも差異のあることがわかる。 四か所の剣鉾の組み方について、 比較できるようにその順番を記してみた。 基本的には大

右対称に掛けしっかりと固定させることなどである。ること、縄を掛ける際は最初輪を作って絞めること、錺には剣先を縛った縄や紐でもって左根元には板(梅ヶ畑では「挟み板」という)または竹を前後にあてがい剣先を棹に安定させ、共通点は、上から剣先・額・受金の順に棹に差し、錺は額の左右にはめ込むこと、剣先の共通点は、上から剣先・額・受金の順に棹に差し、錺は額の左右にはめ込むこと、剣先の

馬を除く三か所は錺の先の部分に縄を掛けるのに対し、鞍馬だけは錺の差し込みに近い部分畑は赤い麻縄、嵯峨と鞍馬は紫または紺の前二か所よりは細い縄または紐を用いること、鞍逆に異なる点は、組み方の手順が地域により微妙に前後すること、東山(一乗寺)と梅ヶ

れ異なる。 れ異なる。 れ異なる。 れ異なる。 など微妙な差異が見られる。なお、西院春日神社の五番鉾は赤い麻縄、聖護院クラを付けるなど微妙な差異が見られる。なお、西院春日神社の五番鉾は赤い麻縄、聖護院に縄を掛けること、その他にも錺に掛ける縄の縛り方はそれぞれ異なり、一乗寺は剣先にマ

来の伝承過程でバリエイションを発生させる余地を含んでいる。以上のように、剣鉾の組み方は基本的には変わらないが枝葉では様々な差異が見られ、

(2) 以前に滋賀県大津市萱野神社の祭りで、立ててある剣鉾について年配の人に質問をしたことが推測された。 りいう いかつて剣鉾をよく見ると、握ったあたりに手垢や摩滅など使用痕が残のを見たことがないという。すでに長い期間、剣鉾が用いられることもなく人々の記憶からとがある。その人は、鉾は祭りのあいだ境内に立てておくものだと思っていて、神幸に差するり、以前に滋賀県大津市萱野神社の祭りで、立ててある剣鉾について年配の人に質問をしたこ

コラム

昭和の京都市内剣鉾調本

离 善通

ことであるので記憶を確かめながらその経緯をまとめたい。十年も前のことである。当時の調査担当者としてこの報告書に一文を、というかつて京都市単独の事業として剣鉾の調査が行われたことがあった。およそ三か回、国庫補助を受けて大規模な剣鉾調査が京都市内で実施されたが、実は

である。

り剣鉾は京都独自のものという認識であった。 その一環として実施されたのである。当時の一般の認識としては、 未詳であった。 九社が示されていたが、剣鉾の合計本数や吹散の詳細など剣鉾行事の大部分は はの視点からみた文化財を守るという意識が条例施行当時は強く、 指定あるいは登録されて現在に至っている。国や府とは異なる、京都市ならで 様々な分野において本格的な文化財調査が開始され、京都市としての文化財が 出雲路氏の「剣鉾覚書(一)」(京都精華学園研究紀要第十輯 昭和四十七年)に市内二十 かった。 (中京区) の出雲路敬直宮司がまとめられた論文三件が刊行されているにすぎな 京都市は昭和五十七年四月に文化財保護条例を施行した。そしてその年から 剣鉾を伴う祭礼が市内のどの神社で行われているかについては、 参考となる文献も、 剣鉾調査も 下御霊神社 現在と異な その

術工芸品としての調査が主目的であった。以下、京都市文化財保護課所有の当吉田光邦先生に調査団のトップになっていただいた。つまり、当時の調査は美化財保護審議会美術工芸品部会で工芸品分野の委員をご担当いただいていた秋と祭礼シーズンに実施された。調査体制は、当時京都大学教授で、京都市文そうした状況下で、現地調査は昭和五十九年秋から始まり、翌昭和六十年春、

時の資料をもとに協力していただいた調査メンバーを記す 坂本博司 金製作所社長)、歴史民俗関係では、山路興造、 直行(前京都市工業試験場職員)、森本安之助 大学助教授)、 工芸室長)、 まず全体の統括として、 染織関係では、 (宇治市歴史資料館職員)、 岩崎雅美、 金工関係では、 相川佳予子(奈良女子大学助教授)、 出雲路敬直(下御霊神社宮司)、 松本秀樹(京都府立総合資料館文化資料課技師)の諸氏 稲田和彦(京都国立博物館工芸室技官)、 (森本錺金具製作所社長)、 一石沢誠司(京都府立総合資料館資料主任)、 河原正彦(京都国立博物館 奥村万亀子(京都府立 (敬称略、 山本真治 所属は当時)。

吹散の調査票を事前に作成印刷した。 込み、 整には困難が伴ったことを記憶している。一日に二つの神社、 員に日程の連絡を行った。当時既に祭礼が週末に行われる神社も多く、 を入れ、 るいは当家)の確認を電話にて行い、 て十一箇所に及ぶこともあった。なお、 調査にあたっては、まず各神社に祭礼の日程、 調査日ごとの調査ルートを確定したうえで再度調査対象箇所および調査 調査可能な日程の確認を行った。次に、 お飾り場が当家の場合はその個人宅に連絡 現地調査に備えて、 住宅地図に調査箇所を落とし 剣鉾の本数、 剣鉾本体ならびに 調査箇所数にし お飾り場

だいたことを記憶している 鉾の縄を解き、 神社などのように剣鉾数の多い場合には三班体制で行った箇所もあった。 は随分とご迷惑をかけた。 は予定時刻を過ぎ、 真撮影等を行い、このほか収納箱の墨書なども可能な限り調査に努めた。 吹散では採寸、技法、文様の確認、写真撮影、歴史民俗では聞き取り調査、 剣鉾本体では剣や鈴をはじめとする各部分の採す、材質、銘の有無、写真撮影、 は当該神社の剣鉾数により、 現地調査では金工、 剣先の調査を行わせていただいたこともあった。 夜間にまで及ぶ場合もあり、 染織、 しかしながら、 一班体制で行った場合もあれば、 歴史民俗の各パート約二人ずつで調査を行った。 関係者いずれも好意的な対応をいた また当家では一度飾られた剣 粟田神社や今宮 当家の方々に

様子は今も私の記憶に鮮明である。 当時の剣鉾調査を振りかえって私の記憶に印象深いのは、実は意外なことに、当時の剣鉾調査を振りかえって私の記憶に印象深いのはいが強くなった。この思いがかなったのは昭和五十九年の秋の日の夕暮、いう思いが強くなった。この思いがかなったのは昭和五十九年の秋の日の夕暮、いう思いが強くなった。この思いがかなったのは昭和五十九年の秋の日の夕暮、四院の春日神社であった。長い棹の先の剣が揺れながら鈴がリズミカルに鳴るの院の春日神社であった。長い棹の先の剣が揺れながら鈴がリズミカルに鳴るとに、当時の剣鉾調査を振りかえって私の記憶に印象深いのは、実は意外なことに、当時の剣鉾調査を振りかえって私の記憶に印象深いのは、実は意外なことに、

たいていもう一本付随しており、総数はこれを遥かに上回る。総数は約百八十本に及んだ。もっとも、剣鉾には留守鉾と称する予備的な鉾が二年にわたる調査であったが、結果、調査対象は三十五か所の社寺、剣鉾の

明する基準作として京都市指定有形文化財(美術工芸品)に指定された。明する基準作として京都市指定有形文化財に登録された。登録の基準は、当該神社の剣鉾がすべて差されているという点である。調査を行ったなかで、当該神社の剣鉾がすべて差されているという点である。調査を行ったなかで、当該神社の剣鉾差しが京都市登録無形民俗文化財に登録された。登録の基準は、当にの人での後、平成二年に一乗寺八大神社、西院春日神社、嵯峨祭、梅ヶ畑平岡八

統展」 昭和六十一年夏には京都市社会教育総合センターで「京の祭の遺宝 されたのは岡佳子氏、現大手前大学教授である。平成九年春には、当時四条高 至るも唯一のものであろう。六十ページほどのカタログも制作され、 においても活用されたと聞いているが、当時この展覧会を中心となってご担当 に調査報告を兼ねた一文を掲載させていただいた。このカタログは今回の調査 文化財展示室で下御霊神社の剣鉾三基が祇園祭の鉾との関連で展示されている 条烏丸の京都三井ビルの二階にあり、祇園祭関連の展示を行っていた三井京都 調査後、 が開催された。 剣鉾の展示も数か所で行われている。 京都の剣鉾に焦点を絞った大きな展覧会としては現在に 昭和六十年七月には、 剣鉾の伝 私も末尾 、当時四

により「京都の剣鉾」展も開催されている。

本稿を記すにあたり振り返ってみれば、前回の剣鉾調査の意義は剣鉾の認知本稿を記すにあたとが何よりも大きな調査の成果ではなかったかと私は思った。そして実は、剣鉾の祭礼に携わる方々に剣鉾の文化財としての重要性を認た。そして実は、剣鉾の祭礼に携わる方々に剣鉾の文化財としての指定、登録によって、たいる。

当時、私は大学院を経て京都市文化財保護課に美術工芸担当の技師として採出され、まだ一年ほどの新米技師であった。美術工芸品の調査にあたった、書をいただきながら、日々研鑽し、ただひたすら若さに任せて調査にあたった、導をいただきながら、日々研鑽し、ただひたすら若さに任せて調査にあたった、導をいただきながら、日々研鑽し、ただひたすら若さに任せて調査にあたった、というのが実情であった。報告書を出せずに終わったというのも、実は未だにというのが実情であった。報告書を出せずに終わったというのも、実は未だにというのが実情であった。報告書を出せずに終わったというのも、実は未だにというのが実情であった。報告書を出せずに終わったというのも、実は未だにさい。

(成安造形大学教授)